
とある隠れ変態の物語

来海ララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある隠れ変態の物語

【Nコード】

N2781V

【作者名】

来海ララ

【あらすじ】

とある街に住む真田 尚輝（高2）は究極の隠れ変態。女好きではなく男好きの男。いわゆる同性愛者。

美しい女性？素敵だとは思うけど別にときめかない。美しい男性？何て素晴らしい響きなんだ！！

残念要素満載な無自覚イケメンの繰り広げる変態な日常物語、開幕
！！

のはずが最近ではハーレムメンバーの方が変態度が右肩上がりに上昇中。

問題ありまくりの変態発言に内心同意したり突っ込んだりあえて突っ込まなかったりする物語。

の方が説明としては正しかったりする。

子猫ちゃん拾いました。(前書き)

初めまして、またはこんにちは。ララです。今回の話しも趣味全開
でお送りいたします。

変態思考なら任せろ！みたいなノリで書き始めた物語なのですが、
相変わらず後先考えずなのでこの先どうなっていくかわかりませんが、
ですが、温かい、いや生ぬるい目でも良いので見守っていて下さい
……。

子猫ちゃん拾いました。

突然だけれどオレの頭の中にはメロディーが鳴りだした。

迷子の迷子の子猫ちゃん、あなたのお家はどこですか、と。

そう、どしゃ降りの雨の中にオレは子猫ちゃんを見つけたのである。それも膝を抱えた子猫ちゃん。

しゃがんで膝に顔をうずめる様子なんかもうきやわゆいの権化でさあ、ねえこの少年口説いて良い？

にやりによりと激しく怪しい以外に形容しがたい変態的笑みを口元に貼り付けるイケメン。

周りにはさぞかし残念に映ったことだろう。

「君」

何とかにやにやを抑えて子猫ちゃんに声をかける。

顔を上げた子猫ちゃんは黒縁メガネっ子だった。もう萌えの結晶だ。

ああああ可愛い！！

背丈はあるし、かっこいい系なんだけど子猫ちゃん以外に何と現したらっ……。

上目遣いがたまらない。ぽかんとした顔もたまらない。出来れば抱きしめたい、そしてそのやらしいうなじに指先を這わせたい！！

「ずぶ濡れだよ。大丈夫？」

傘を子猫ちゃんの頭上に持って行き、自分もその場にしゃがみこむ。顔をよく見ると……

い、イケメンだ。

とんでもないイケメンがここでびしょ濡れになってるよ!!色香がむんむんしてるうう!!!!

大変だほっぺの肉がひくひくしてきた……いつもなら我慢出来るのに、にやにやがっ。

完全に変態思考な事で頭をいっぱいにして微笑みかけるイケメン。世の女の子達はこれを知ったらどう思うだろうか。

我慢して我慢して、いやらしくは見えないであろうまんべんの笑顔で見つめると、なんと子猫ちゃんが

がばっ!と抱きついてきた。

そして一言。

いや、二言。

「寒い。お兄さん助けて」

「うん、いいよ。家においで」

もう即答。即答だなんてこったい。何だこのイベントは。現実世界はいつから攻略ゲーム方式になったのだろうか。分からないけどラッキー!!

内心ガッツポーズを取りまくりながらどさくさに紛れて腰に腕を回すとお兄さんえっち、なんて表情を変えずに言う。

何？変態め？ははは、今更何だ。ゴーイングマイウェイだ。

「まあまあ、ね。ほら立って」

子猫ちゃんを支えて立たせ、傘の中に入れて肩を抱き寄せる。

すっかり冷え切った体を少しでも温めようと、バックから出したタオルで拭く。何て素晴らしいイベントだ。うわ色っぽい。滴る雫とか伝う首筋とか鎖骨とか。あはははやばい！！

さあ、行こうか。子猫ちゃん。家はすぐそこだからね。

楽しい休日の始まりだひゃっほーい！！明日が休みで良かったー！！

真田家

「ありがとうございます」

「いいえ。寒いよね？タオル持ってくるから」

着くやいなやぺこりと頭を下げる子猫ちゃん。何て礼儀正しいんだよし後でなでなでしてあげよう。タオルタオル、っと。

洗面所のオレンジ色の棚をあさくって目的の物発見。いざ、少年の元へ。いざ、少年の元へと下心を頑張つて隠してタオルを渡すと、こてんと首を傾げられる。

「何でここまでしてくれるんですか？」

ああそれが。

「だってあんな雨の中にいたら風邪ひいちゃうでしょ？オレ一人暮らしたから遠慮しなくて良いよ」

だってこれはチャンスでしょ？可愛い子猫ちゃんがずぶ濡れになってたら理屈こねて持って帰って来なきゃ。オレ一人暮らしたから遠慮なんて必要無いし。えへへ。

「お兄さん優しいんですね。助かりました」

「いえいえ。気にしないで」

いえいえ。下心満載ですから。

「侑里ゆうじ」

「え？」

「オレの名前です。君じゃなくて名前で呼ばれたいので」

おおおそれはそれは。

呼んで下さいじゃなくて呼ばれたいのでときたか。何て可愛い思考回路してるんだ。そして初対面のオレに名前を覚えてくれるとは。何て無防備なんだ、是非とも襲わせて頂きたい。

「うん分かった侑里くん。オレは尚輝なほきって呼んで？」

「尚輝……お兄ちゃん？」

こてん、と再び首を傾げる侑里くん。

うわああ不意打ち不意打ち！！何々どうしよう！？お兄ちゃん？お兄さんじゃなくてお兄ちゃん？！！！！

大事な事だからもう一回言うよ、お兄ちゃん？！

「そう。宜しくね」

「宜しく願います、尚輝お兄ちゃん」

やはり笑いはしないけれど、少しだけ、少しだけ表情がやわらかくなつた気がした。

「お願いがあります。迷子になつたので、助けて欲しいんです」

「うん、分かつたよ。とりあえず、中入って？」

「おじゃまします」

「はいどうぞ」

迷子か……。つて事は 迷子の迷子の子猫ちゃん、は間違つてなかつた訳か。我ながら凄いな。

でも何で迷子？もしかして

「究極の方向オンチなんです。すみません」
やっぱり。

何て可愛いんだ、方向オンチ？それならお兄さんが何処へでも連れて行つて、あれ？

そういえば侑里くんて何歳なんだろう……。

「ねえ侑里くんてさ、何歳なの？」

「15歳……中三です。お兄ちゃんは？」

「オレ？オレは17歳 高二だよ」

「高二……ですか」

「そうそう。あ、そうだ。侑里くんち、電話しないとね？きっと皆心配してるよ」

「番号……忘れちゃった」

「そっか、忘れちゃったか」

本当に可愛いんだなあ、自宅の番号も忘れちゃうなんて。

……ん？

て事は。

「ええええええ!!」

この子、家帰れないじゃないか!!?!?!
どうするの?!

どうするの、もらっていいのっ?!

こんな状況でもそんな思考回路になってしまっ自分が恨めしいが、
どうしてもそっ考えてしまっのだから仕方無い。

にしても……

どうすんの、この状況。

子猫ちゃんといっちゃん(前書き)

暴走しすぎてとんでもない事に……。。

子猫ちゃんといちゃいちゃ

どうすんのどうすんのと頭で必死に考えて考えて

「携帯」

「え？」

「携帯見れば分かる」

侑里くん！それ、先に言ってくれろ？意外にあっさり解決しちゃったよ！！

残念、もらえないのか……。

解決したのだから喜ばなければいけないのだろうが、素直に喜べない。お泊まり会は無しか……。

「でも外雨凄いいから、出来れば泊めて欲しいです」

「良いよ良いよ。泊まってる？」

よっしゃきたー！！台風万歳万歳。

「尚輝お兄ちゃん、寂しがり？」

「あはは、そうかもしれないなあ……。つえ？」

照れ笑いを浮かべて顎に指を添えていると、侑里くんが頭をなでなでしてくれた。

「寂しがりな尚輝お兄ちゃん……一人暮らしだから？」

二人で座るにはいささか狭いソファーだから距離も吐息も近い。

やばい、楽しい!!

にやにやとしそうになって、必死にそれを押しとどめる。無理に我慢したせいで眉を寄せた、少し寂しそうな表情になってしまった。侑里くんは、その短い沈黙と表情とで問いを肯定していると思っただらしい。ぎゅゅと抱きしめてくれた。

「尚輝お兄ちゃん……こんなに優しいのに、悲しまないといけないの……」

「侑里くん……?」

待つて待つて待つて待つて、オレおかしくなりそう!!!!!!

何かあれだ。オレ侑里くん大好き!!!!!!

あんまり表情変えないけど優しくて、ちょっと勘違い屋さんな侑里くん。

最早愛しいです。

でも、今は侑里くんの勘違いに乗らせてもらおう、うん。

「でもね、今は侑里くんがいてくれるでしょ?だから、寂しく無い。せめて今夜は一緒にいて欲しいな?」

「尚輝お兄ちゃん……ちょっとえっち」

「そうだね。侑里くんが優しいから食べちゃうかも……しれないね」
「っ……………」

おおお、真っ赤になった。

メガネの奥の双眸はずっと涼しいままだった、のに。

オレの膝の間でちょこんと座り直す様子にはあんまり余裕が無くて。

「いじめちゃったね……?ごめん。シャワー浴びておいで。びちよびちよだから、風邪ひいちゃう」

「はい。あ、夜ご飯は迷子になる前にかろつじて済ませてあるので……」
「了解。ゆっくり入って来てね」

「シャワー、ありがとうございました。……服も」

「いいえ。侑里くんは、甘い物平気？」

「はい。……というか」

「甘党、かな？」

「……はい」

もう駄目だ、我慢出来ない。

「パジャマ似合うね。可愛いー」

思わずすりすり。ほら、にゃんにゃんにすりすりしたっておかしくないよね？

「チーズケーキあるから、食べよ？」

「ありがとうございます……」

「いいえ〜」

いただきます、小さく呟いてケーキを口に運ぶ。すると一瞬にして表情がほころんだ。

美味しい……。瞳をキラキラさせてそう言侑里くんは凄く嬉しそうで、こっちも嬉しくなる。

「実は手作り」

「手作りっ?!」

にこっと笑ってそうだよ、と口にするとしばらくの間じっと見つめられて。

「あーん」

何故そうなるのかケーキをオレの口元まで運んでくれる。

「あーん」

素直に口を開けてケーキを待つ。口の中に入り込んできたケーキは特別に美味しい気がする。

あれ、これって間接キス？侑里くと間接キスッ?!

うそー！ー!?!?

たっのしいい!?!?!!

もう有頂天。テンションマックス。

ゆうりくんっつと、かんせつつきっす〜

あーんにはまったのか、それからも天使な時間は続いて。

「あーん」

「あーん」

「あーん」

「あー！ー！ーん」

こーんやはたつのしいいな

「あ、自宅には電話した？」

「はい。明日の昼頃、来てくれるそうです。……住所は後で送ってと兄が」

「お兄さんいるんだ」

きつとすつてきなお兄さん

「大学生です」

「そっかそっか。侑里くん、あーん」

「あーん」

ちゅ

「へ？」

ごめんね、したくなっちゃった

耳元で囁くと隣にいる侑里に頬をわしつとつかまれる。

え？

と、唇に柔らかいものが……。

そしてすぐに口の中に温かい舌が入り込んできて…

「っ、んふ…むっ」

侑里くん?! どうしてそんなにサービス精神旺盛なの、君は!!!!!!

ちゅぱ、と音を立てて唇が離れていき、負けず嫌いです、と動く。

いよっし、それなら。

「お兄ちゃん、やられっぱなしは悔しいから。……舌、出しなさい」
「……はい」

うん、やっぱり素直な子だ。

それを良いことに、その舌を思い切り吸い上げる。びくりと肩が跳ねるけれどこれはまだ序章。

舌を伝って口の中へと入り込み、口腔をぐぶぐぶと舐めまわして官能をくすぐった。

「あふう、んっ、んんうっ」

瞳を潤ませて眉を寄せる。

どうしても耐えられないらしく、軽く腰が動き出してきた。

そう、このまま……。

侑里くんを抱きしめながら深いキスをさらに深くして。

はあはあと息を荒げる可愛いにゃんにゃんは、もう何をしても誘っているようにしか見えぬ。

それから侑里さんの負けず嫌い尚輝の下心のせいで悪循環は続き。

以下、会話抜擢。

尚輝攻め

「おにいちゃ、あんっ、そこ駄目えっ」

「侑里くんなんてオレのアナル舌突っ込んだでしょ？ペニス舐める位何？」

「はあ、はあっ、口、入れてしゃべん、ない、でええっ」

侑里攻め

「ほら、ちゃんと足開いて下さい。オレのと擦れないでしょ」

「いや、いい、いいって。そろそろオレおかしくなりそう」

「開いて下さい。ローション塗っちゃいますよ」

「もう塗ってるし！！ちよ、侑里くんっ……っひあ、あっ、君も十分えっぢゃないか！！」

「まあ、兄程では無いにしても、こんなになってる尚輝お兄ちゃんをほっとけないでしょ」

「答えになってない答えになってない！！」

とまあ、どんどん悪化し。

最終的には尚輝の下心が勝った訳だけれど。

結果、分かった事は。

侑里くんはものすごい負けず嫌いで、ものすごいえっちって事。
それと彼曰わく兄はオレを超えますらしいから、お兄さんはもついで
るいらとんでもない。

明日会うの、楽しみになってきた。

容赦の無い弟は拾われました。

時を二時間ほど遡った、五時頃

マンマミア、マンマミア、と某ゲームの某キャラが息の音を止める瞬間の苦しげな声が携帯から流れる。

侑里か……。

友人にいい加減着信音をマオの息絶える時の声にするのをやめろと言われたが、約半年程無視をし続けていた。だつて、面白いだろ？

次は何にしようかと考えつつ、電話に出ると

『ドラ もんが道具を出す瞬間のメロディーにしたら？』

『おお良いなそれ っておい』

『何？』

『何で分かつたんだよ』

『どうせ次はどんなのにしようかとか、考えてたんでしょ』

『いやまあ、そうだけど……。で、お前の用事は何だ？迷子か』

『うん。迷子になった所を優しく綺麗なお兄ちゃんに助けてもらった』

『まじで？お前の迷子癖にはもう突っ込まないけど、優しく綺麗なお兄ちゃんっておま、良いなあ』

『ついでにちよつとえつち』

『おおお、文句なしだ。明日迎えに行つてやるからいい夜過ごせよ』
『うん分かった』

侑斗には相変わらず変態だな。

いつもの事だけど。とか、考えてそうだな……。

『それで、どれ位綺麗？』

『千春さん位』

『ええそれやばいな！！』

千春さん（男）、とは夜の街で大活躍している隼人さんの恋人（男）である。隼人さんも綺麗だけど、彼の綺麗さとは部類が違う。淡々としゃべる侑里は何を考えているのかよくわからないけど、とにかくその綺麗なお兄ちゃんが本当にお世辞でなく綺麗なのだという事はよく分かった。

『千春さんの背が少し縮んで、口調が優しくなったら尚輝お兄ちゃんになる。後、多分だけど自分が綺麗って分かってない』

『よっしゃきた！！明日はオレも泊まっちゃおうかな』

『侑斗には尚輝お兄ちゃん襲おうとするから駄目』

『えー何でえ！！！！せつかくの休日、楽しく過ごしたいだろ』

『侑斗にいの楽しくは体の関係に発展するから駄目。そろそろ切るよ』

『よ』

『えー何でえ』

『オレ今裸』

『えっ？！何で！！！！』

『風呂』

『えっ？！！！！……………あぁ、風呂ね』

『変な事想像したでしょ』

『えええ別に？ベットでハグされながら携帯中とか、考えてないし？』

『全部言ってる。じゃあね』

『待て待て待 ぶちっ』

見事にブツ切りを弟にされて地味に落ち込む。

あいつは容赦なさすぎだ……。

両親は今海外出張中で家には侑里とオレしかいない。二人きりでも寂しいのに、一人はもう孤独としか言い表せない。

それだけに、明日がやけに楽しみだと感じた。

お昼寝は子猫に囲まれて

ピンポン、とチャイムが真田家に鳴り響く。

現在は十一時。時間帯的に考えて、侑里くんのお兄さんが迎えに来たのだろう。

さて、どんな素敵なお兄さんなのか、いざ行かん!!

「はい」

返事をしてがちゃりとドアを開けると、そこには長身で美人でやわらかな金髪のお兄さんらしき人。

「侑里くんのお兄さん、ですか？」

「そう。始めまして、侑斗です。尚輝お兄ちゃんって、君？」

「おにいちゃ……はい、そうです」

そうか、侑里くんはお兄さんへの電話でもそう呼んでただね……。それにしても、この人が。

……本当にすつてきなお兄さん、だなあ……。この人が凄いえつつて、何だか分かる気がする。

何でつて？だってこの人さつきからフェロモン垂れ流しだよ!!いや、変態とフェロモン関係ないけどさ。

昨日引き続き、外は絶好調に雨。台風は過ぎ去ったみたいだけど……。

そのせいで髪や服に少し水分が含まれていて、長いまつげにも、綺麗な色をした唇にも、いつも以上の色香が漂っているのだろう、きつと。

そんな事をぼつとしながら考えていると、突如妖艶な笑みを浮かべる侑斗さん。

びくりと心臓が跳ねる。

「確かに。侑里が言ってた通り、凄く綺麗……」

顎を指先でくいつと上げられて、視線を合わせられる。

「お前……おいしそうだな」

舌なめずりをする様子なんかも、綺麗過ぎて様になる。

「……侑斗さんの方がおいしそうですよ？」

「食べてみる？」

くすり、と笑うこの方は、確かに変態だ。下手したらオレより……

いや、それは無い!!!!!!

それについてはオレが度を超えてるからなあ。

それにしても。

今までは頑張つて変態であるという事実を隠してきたのに、どうしてこつもこの兄弟にはあっさりバレてしまったのだろうか。

謎だ。

侑里くんについては、昨夜の事があるから仕方ないとしても。

……いやいや、何で腰に腕を回しただけで変態扱いされたんだろ。

あれかな？オレも変態なので、分かりましたとかいう同族察知機能が発動したのかな？

「……とか言って」

「へ？」

「侑里がちょっとえっちって言ってたから、試したくなっただけ」

なるほど、犯人は侑里くんね。

納得。

夕チが悪いなあ、二人共。

「あ、侑里は？」

「侑里くんは昨日びしょ濡れになったのが祟ってか、少し熱をだしてしまいました……ベットで寝てます」

「尚輝の？ベット？？」

「は、はい」

何だろう、急に。

「なにそれ。羨ましい」

うん、変態だ。確信した。

侑斗さんはオレの部屋に入るなり、それはもう瞬間移動のような速さで侑里くんの近くまで行き。

「お前、わざとか？」

病人にかける言葉がそれかっ！！！！何て突っ込み所満載なんだ。

「わざと？オレは侑斗にいほど変態じゃない」

「それはそうだ」

え？じゃあ侑斗さんの場合本当に病気が分からないって事？

拾ったの、侑里くん良かったかも。

それにしても、それにしてもだ。

素晴らしい光景だ。

二人共綺麗だからもう、絵になっちゃって絵になっちゃって。

そっか、だよな。よしよし。

なんて言いながら侑里くんをなでなでする侑斗さん。

くすぐったそうに目を細める様子もやっぱり子猫みたく可愛らしい。そして恒例のおでここっつんである。

うわ、うわそろそろ自制心飛ぶ！！

「微熱程度で良かったな」

「ん。……侑斗に……。手」

「手？甘えんぼ」

「いいよ、何とでも言っつてよ」

相変わらずあまり表情は変えずに差し出された手に指をからめる。

そうすると、やはり少しだけ表情がやわらかくなった気がして。

何て言うか、正直とってもごちそうさまな感じ。

「はあ……」

美人って良いなあ良いなあ！！

ほれほれしちゃう。

んで、さつきから気になってるのが、侑斗さんのフード。なんか余分？な布が付いてる。
いやしかし、場合によっては余分所か、そのフードを被って下さいになるんだけど。

「ネコミミフード」

えっ！！！！！

「ネコミミ？」

「うん。オレが誕生日あげたやつ」

「そうそう。可愛いだろ？」

やっぱり？！

あの布ネコさんのおみみ？！！！！

ネコさんのおみみを両手で持ってぴこぴこ動かしてみせる変態美人やめて、まんべんの笑みなんて浮かべないで！！！！！！
侑里くんプレゼントのセレクトナイス！！

「そうですね。何か無駄に似合っ……」

そうですね、似合い過ぎてっ……！！似合い過ぎて……ハグしたい
！！やばい、吐血する……

「尚輝、お前もこっち来いよ」

「いいです、オレは」

勘弁してくれえ……

「尚輝お兄ちゃん……」

「え………」

「尚輝、オレと侑里嫌い？」

「えええ?!」

まさか、めっそもございませぬ!!むしろ大好き。

「おいでよ?」

「来いって」

待て待て待て待て、二人して首かしげるのやめてくれる?ついでに
瞳うるうるさせないでくれる、良いの、行っちゃうよ?

「は、はい………」

そろそろと歩いて行くと、満足げになっり。
とっても可愛い子猫な兄弟。

で、何でこうなるの?
オレ心臓痛いよ……。

何故かシングルベットの真ん中にオレ、右に侑斗さん左に侑里くん。
何故かハグされて何故か囲まれて。

「尚輝お兄ちゃん、さみしんぼだから」

「あ、そうなのか。可愛いな!」

あなたは美しいです。

「じゃあ、お休み」

「へ?」

「早起きだから疲れた。じゃ」

じゃって……。

にこりと微笑んですーすーと早くも寝息をたて始める。

え、え?!こついつのつて、何て言っただっけ?

うーんうーんと必死に考える尚輝。けれども段々眠気が襲ってきて、駄目だ眠たい、そう思ってしまった瞬間、眠りというまみどろの中に引きずり込まれた。

それから約二時間……子猫に囲まれて、お昼寝タイム……。

そして目が覚めた時……

わっ、これって……

ハーレムだ。

今夜は素敵な夜ご飯

「うわ、すげえ雨」

「わー……この中帰るのはちょっと危険ですね」
「……………」

あの後昼ご飯をみんなで食べて、わいわいしゃべっていたのだが、盛り上がり過ぎて結局夜の六時半。雨が再来したせいで（しかもまた台風みたいな勢いの）星草兄弟は真田家で足留めをくらっていた。しかしこの兄弟、既に手慣れた様子で、ネコミミフードの兄は絨毯の上でごろんごろんしているし、風邪を引いた弟はベットの上で読書タイム。

「なあ」

「はい？」

そして兄、侑斗さんは唐突に

「今日、泊めて？」

急にそう言い出されたら普通は困るのだろうが……
ほらオレ、普通じゃないからさ。もちろん

「いいですよ」

当然、もちろん、当たり前。

オレがこんな美味しいお願いを断る訳無いでしょ。

今夜も楽しい楽しいイベント……あるといいな。）、）、（）

そして、夕食タイム。

今日の夕食は、みんな食べ盛りだから大皿に大量のお肉炒め、そして豆腐ハンバーグにベーコンとチーズのシーザーサラダ。

「うまい」「おいしい」

侑里くと侑斗さんがほぼ同時に言ってくれるものだから、嬉しくてくすぐったい気分になる。

「ありがとう」

思わず笑みを浮かべてしまう。

「尚輝、いい嫁になるぞ。いつそオレが」

「侑斗には変態だから駄目」

「ええ、何で!!!!!!お前だって変態だろ」

「侑斗にいきなりマシ」

いや、侑里くんも昨日結構凄かったけど。

思った事が通じたのか、視線が合うと侑里くんに、ふっと不適な表情をされた。

本当に何を考えてるか分からないなあ……。まあそついうミステリアスな所も魅力の内の一つなだけだよ。

「尚輝お兄ちゃん」

「うん？」

「あーん」

「あーん」

あぐっ。

うん、美味しい。やっぱり侑里くんのあーんには不思議な力があるんだな。一気に美味しくなった。今夜も天使タイム

「何だよ、二人して。尚輝あーん」

「あーん」

あぐっ。

あれ？

侑斗さん自分で食べちゃったし！！！！

お茶目だな、と思って口を閉じると

「らから、あー」

だから、あーんと言いたいらしい。再び口を開けると、何故かあの綺麗な唇が近付いてきて。

ぐいっと口の中にベーコンとチーズのシーザーサラダが突っ込まれる。それから少し、口腔を舌で舐め回されて

「はい、じゅくじゅくして」

じゅくっ。

「うん、美味しかった」

「美味しかったって侑斗には何を味わってたの」

「ちゅーとサラダ」

「サラダはついででしょ」

「おー、よく分かったな」

だろうね、と呟く侑里くんは若干呆れ顔。

オレ？オレはもう素敵なイベントに拍手送ってる最中だよ！

侑斗さんに舐め回された口腔はいつまでも熱くて溶けそう。再び舌なめずりしながら妖艶な笑みを浮かべて、オレの心をかっさらっていく。

何でもこうもときめくような事をしてくれるんだろっ、この兄弟は！

！！！！どっちが好きって？

どっちも好きだよ！！！！エヘッ

「にしても、尚輝って料理上手いな」

「ありがとうございます。良かったら、また食べたくなったら来て下さい」

ありがとうございます。食べたくなったら来て下さい。次はオレが
あーんやるので。うへへ！！！！

「ん、分かった」

「チーズケーキ、美味しかった」

「ケーキならまだあるよ」

「ケーキ？何だそれ」

と、言う事で、昨日引き続きケーキタイム。今日はチーズケーキプラス、プチフルーツケーキ。

「どござ」

「「いただきます」」

同時に言ったと思いきや、

「「あーん」」

同時にこれである。

「いや、次はオレが先に」

「侑斗にいちゅーするから駄目」

「いや、ちゅーはしない」

「するつもりでしょ」

「お前だってそうだが」

やはり無表情な侑里くとぶつと頬を膨らませる侑斗さん。

対称的で子猫な兄弟にはさまれてあーんの嵐。

もつたまらないね、これは。

全国の変態の皆さん、

どうだ、羨ましいだろう。

今夜は素敵な夜ご飯 (後書き)

こんな夜ご飯、あったらいいのに(笑)

素敵な休日の後の学校も素敵だった！

「あら、真田くん、おはようございます」

「ゆずこ 柚子さん、おはよう。今日も綺麗だね？」

「あつ、あらあ……」

柚子 美結、みゆう 柚子財閥の一人娘、真正正銘のお嬢様だ。

彼女はどうかやらオレを気に入ってくれたらしく、毎朝欠かさず挨拶をしてくれる。クラスメートに良いなあ良いなあとよく言われるが、オレは正直そこまで羨ましがられる理由が分からない。

ほら、オレ女性興味無いし。

綺麗だとは思うけど、ときめいたりはしない。

それだったら野郎しかいない教室の中の方が楽しいかな？

オレの通っている比等学園は女子と男子でクラスが分けられているので、教室内は野郎のみ。とっても素敵な空間だ。

「あつ、尚輝いおはよー」

「おはよう、舞亜」

前の席の舞亜まいあ 羽恋はれん。“女性”みたいな名前で、“女の子”みたいな容姿が舞亜の特徴。

確かにオレは男が好きだけど、野郎しかいないのはやはり華が無い。そんな教室の唯一無二な華的存在。

本人は知らないが、女性より野郎ファンの方が圧倒的に多い。

「尚輝、数学の宿題分らない所あって」

「ん、どっ？」

舞亜の出したテキストを覗き込み、解き方を思い出す。確かこれは

「あ、オレここ得意だから教えられそう」

「尚輝が得意なのは勉強全般だろー」

ぷつと頬を膨らませて舞亜は言うけれど、朝っぱらからそんな事されたって興奮するだけだから、出来れば放課後に……。

内心舞亜の可愛さに、にたにたしながら問題をちよいちよいと解いていく。

「はい、出来た。解き方はここに書いてあるのを読めば分かる筈だから」

「おおー！流石だなあ」

「ありがとう」

フツとクールのアレな笑みを顔に貼り付けるけれど、内心乱れまくっていた。

ねえ、舞亜さん？羽恋さん？お願いだから、手なんて握りしめないで。

ときめいてそのノリで体が浮くよ！！？！

素敵な休日の後だから、学校行くのノリ気じゃなかったんだけど、このハーレムな教室を忘れてた。

オレ、今日一日君たちの為に頑張るからねっ

「にしても、尚輝って凄いよな。勉強出来て、スポーツ出来て、顔も良いとかどつかのアニメの主人公みたい」

「え、何？それオレの事？」

「お前しかいないだろー。オレ尚輝の事大好きだぞ？」

「何それ。凄い嬉しい！」

きゅ〜、っとちっちゃいわんこみたいな舞亜を抱きしめる。あんまり可愛くて我慢出来なかった。

自重？ナニソレオイシイノ？なんていつのネタだよと思うような言葉まで浮かんでくる始末。

参ったなあ〜（。；ノ）ノ あはは。

「んう〜、尚輝苦しい……」

「ごめんごめん。今凄く疲れてるからさ、舞亜オレの癒やしになって？……良いよね」

「んむむ、無言の重圧感じるぞ？な、尚輝なら、良いけどな。こんな事するなんて珍しいし」

「ありがと〜大好き、超大好き。舞亜ぎゅ〜」

ちっちゃくて可愛くて人なつっこくて大好きだと言ってくれる舞亜。教室内での一番の癒やしかも。

「なおきい……そろそろ、視線、い、い、いたい……かも」

「視線？ああ、ごめん。流石に朝から男同士でハグは無いよね」

やばい、調子に乗っちゃった。変態ってバレたかな、星草兄弟の時みたいに。

「ううん、オレは良いんだけどな。……尚輝のファンの女の子の視

線がな、廊下の方からはしばし来て……」

オレは全然良いんだぞ良いんだぞと言う舞亜は、本当に嫌そうには見えなかったのでほっとした。

「オレのファン？あはは、いないいない。舞亜のファンじゃないの？」

野郎の、とは言わないでおく。

本当に信じられなくて、廊下の方の会話に耳をすませると、比較的近くな為によく聞こえた。

右端の集団

「あらあんなにくつついて！！朝からなんて事を」

「尚輝様はお優しいから我慢してるのよ」

「いやーん、信じられない」

え？何？今のって明らかにオレから抱きついたよね？何でそうなるんだろ。

左端の集団

「おおお？朝から？朝からあんなうふふ？」

「あっはっはっはたまんねえわ」

あれ？左端の集団は好印象？というか、オレと同族の子達だ。よし、ここはもうちょい。

「舞亜、ちよつと付き合って」

「ふえ？ひひよー」

途中からイチゴジャムのパンを食べ出した舞亜の腕を掴んで左端の集団近くへ。

「……羽恋」

「ふええ？は、はれ、なまなまなまえ……」

初めて名前で呼んだからか、少し動転してる様子。可愛いから無視。

「名前じゃ、駄目？羽恋だって尚輝ってオレの事呼ぶよね？」

「別に駄目じゃ、駄目じゃ無いぞ？！」

「うん。ありがとう」

「名前で呼び合う仲？！」

「どんな仲、どんな仲？！」

うん、間違い無い。
同族の方だ。

同族の方にはサービスしなきゃ！！

「尚輝、パン食べるー？」

「ん、ちよーだい。あーんして？」

「ふあ、つう、あー？」

「あーん」

あぐっ

「あーんきたああああ」

「そうなの、そういう仲なのー」

「えへへやっぱりえへへ！」

ちよつと誤解されちゃったけど、まあ良いや。
素敵な誤解だし。

そしてここに星草兄弟が来たらもつと面白い事になるんだろうなあ
と考えて、いざ妄想ワールド。

侑里『尚輝お兄ちゃん許して（棒読み）』

尚輝『ぐっへっへ、良いではないか良いではないか』

侑里『そんなー（棒読み）』

尚輝『回れ回れ』

侑里『あーれー』

尚輝『もっと回れ』

侑里『あーれー』

侑斗『え、何々、悪徳代官ごっこ？オレもやりたい』

侑里『お兄ちゃんは駄目だよ（棒読み）』

侑斗『ええ、何でええ』

侑里『体の関係に発展するから（棒読み）』

羽恋『ひいつ？！尚輝って変態だったのか！』

駄目だ、速攻ばれる！！！！

この兄弟は綺麗だけど危険だ……。

「尚輝？どしたんだ？」

「ああ、いや。何でもない。あれ？口の端、パンくず付いてるよ」

取ってあげるね。

右端の集団の誤解を解くべく、わざと右側に寄って会話が聞こえるようにする。

なおかつ、左端の集団のサービスにもなるように、真ん中辺りで。とん、と壁に寄りかかせて羽恋の頭に左手を添えながら……。

「ぶっ」

左端の集団の子が一人ぶっ倒れる。今からが良い所なのに。

「はい、取れた。羽恋はおちゃめだね」

真っ赤になる羽恋と左右の集団。
でもやっぱり、羽恋が一番。

教室内の羽恋ファンの視線がぐさぐさと刺さってきたが、無視。
真っ赤な羽恋を前にすれば、オレは怖いものなんて無い。

帰り一緒に帰っていた時なんか

「……なあ、どしたんだ。今日の尚輝おかしいぞ？その、何か……
どきどきする……」

「ふふ、嬉しい事言ってくれるね」

羽恋にまでおかしいと言われたけど、これはアリだ。もう最高にアリだ。人目が無いのを良い事に別れ際、おでこにちゅーしてきた。星草兄弟はしょっちゅー真っ赤になったりしないから、羽恋の反応は凄く新鮮で。

「ちゅ」

と頬に仕返してくれた彼が愛しくて持ち帰りたい気持ちでいっぱいなのだが、流石に自重した。その代わり来週遊ぼうなと言ってくれたので十二分に盛り上がった。(内心)

その後、クラスメートの喋った事も無い野郎から

『真田って舞亜と仲良いんだな』
なんて言われて。

『そうだね。何かと頼ってくれるから、それから段々ね』
そう言くと羨ましいな、と苦笑いして立ち去ってしまった。

しかし、今日は羽目を外し過ぎた。これ以上行くとバレる。女の子に優しい優男キャラ演じとかなないと、ホモだって気付かれて、羽恋に嫌われて……

うわ、悪循環!!

これからは気をつけよう、と肝に銘じた尚輝であった。

羽恋とデート、正午の部（前書き）

学校編、飛んで飛んで羽恋とデート（笑）
書きたかったんです…

羽恋とデート、正午の部

やっと梅雨も明けた今日この頃ここ最近。

それでも湿度はまだまだ高くて。正直こんな季節に出かけるなんてありえないんだけど。

今日ばかりは特別だ。

だって、隣に居るのが羽恋だから。

来週遊ぼと言ってくれた羽恋に乘っかり、現在は楽しくお昼ご飯タイム。

そして高校生のお昼といえば、ジャンクフードが定番。その中でも圧倒的な人気を誇るのが、マック。

「そういえば、羽恋と遊ぶのって初めてだよね」

「だよなー。今までも何度か誘おうと思ったんだけどな、尚輝っていつも女子が男子に囲まれてるんだもん」

「あはは、そう、かなあ？」

「そうだそうだ。だから……」

「うん？だから？」

ポテトをほおばっている羽恋の顔を覗き込むと、ほんのり朱色になっ

ていて。

和むなあ……。

「な、何でもない」

「ふふ、どうして黙っちゃうの？……もしかして、嫉妬でもしてくれただかな？」

もしもそうだったら、躊躇はしない。即抱きしめる。んでどぞとくに紛れてほっぺにちゅーする。

まあ、有り得ないけどね。どんだけタラシなんだよーとか言われるだけに決まってる。

と、思ったのに。

羽恋はさらに真っ赤になって、恥ずかしさからか涙をつつすらと浮かべ、綺麗な瞳を濡らしていた。

「……………ん、っ……………あっ、なあきいつ……………」

あんま見ないでえ……………恥ずかし……………。

羽恋は二年にあがってからの友達だから、まだ半年も一緒にいないけど、凄く分かりやすい事と凶星だと真っ赤になる事は理解した。

もしかしてこれは期待して良いのかも。

「嫌だよ。いくら羽恋のお願いでも聞けない。　　ねえ羽恋？教えて」

耳元でそっと囁くとびくりと肩を震わせてじっと見つめられる。

ああ……………シアワセ…！

そんな濡れた目で見ないでよ、興奮してくる。

「さっ、最近の尚輝……………おかしい。ちょっと……………いじわるになった」「羽恋が可愛くてさ。ただそれだけ」

「か、かわっ……。ううう、そうだよ……。嫉妬、してた。だって、だってだって尚輝が他の人とばっか話すからっ、オレの入る余地なんて全然無くて」

一番奥の席で良かった。

仕切りがあるから何しても大丈夫。

正直に話してくれる羽恋が愛しくて。

「ありがとう、羽恋。めちゃくちゃ嬉しい」

「はうっ……。でも、でも何かオレ、今の……。ホモっぽくないか？」

「あははっ、そうかもね。でも関係ない。羽恋がそう言ってくれたら、どうでもいいよ。だからほら、泣かないで……。あんまり泣くと襲うから」

「ふえっ?!」

もちろん後半は本音である。けれど羽恋は泣いている自分をなくさめてくれたと解釈したらしく、ありがとなと笑顔で言った。

「まあ……。尚輝に襲われるなら本望だけどなー」

「そんな事言ったら本当に襲っちゃうよ?」

冗談じゃないから、本当に襲うから。

今日は我慢しないって決めたから。いや、多少我慢するよ、多少は。

「うむむ、そんな事言ったら彼女が悲しむ……。あれ?尚輝って彼女居るのか?!」

「いないよそんな子」

変態ですから。いや、ホモですから。

「えー、尚輝ならすぐ出来ると思っただけだな」

「いらぬいよ、オレは自由が良いし。好みの女の子いないし」

女の子はね。

それより羽恋が欲しいよ。なんて、言えないけどさ。

それから数分後……。

「えっ、良いつて。代金自分の分位払うって」

「いいの。オレが払いたいから。ね？バイトしてるから大丈夫」

「うー、ありあと……」

「どういたしまして」

払うから払うからと言う羽恋を無理矢理ねじ伏せて、代金を払う。

やましい妄想をさせてくれたし、可愛い事言ってくれたからさ。

ほんのお礼。

とは言えない。

マツクのお姉さんの、元気なありがとございましてに背を向けて店を出る。

さて、次は何するかね。

「ありがと……あ、っと、何か命令して。叶えられたら……頑張るから」

命令?!

なんて良い響き。

羽恋、君人を喜ばせるの上手だね！！！！

でもね？

それは駄目だよ女装してとか言っちゃうから。

「羽恋、それは駄目。オレが勝手に払っただけだから」

「尚輝、それは駄目だ。オレが勝手にしたいだけだから」

うわっ、ひっくり返された！

「……なら、そうだね。オレの彼女役、やってくれる？」

ならここは、当たり前障りなく。

「彼女役？オレで良いのか？」

「だって叶えてくれるんでしょ？羽恋」

「むむっ、分かった。じよ、じよ、女装もだったりするのか？」

「その辺の判断は羽恋に任せるよ。叶えてくれるんでしょ？」

よし、地味に重圧かけとこっつと。

分かった……とまた赤くなって言う羽恋は、きつと女装も「丁寧にしてくれるんだろう」と思った。

羽恋とデート、正午の部（後書き）

連載し始めて10日程経ちました。

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

これからも日々変態度が上昇していきますが、出来れば生暖かい目で見守っていて下さい…。

拙い文章に拙い話ですが、少しでも気に入って下されば感想などを恵ん（d y

本当にありがとうございます！！

羽恋とデート、女の子の部

かつ、

可愛い可愛い！……！

「……ど、どうだ？」

トマトみたいに真っ赤になってエクステを落ち着き無く指先でクルクルといじる彼、否。

今は彼女だ。

今日の羽恋は深緑のつなぎ、中には半袖ワイシャツ。靴は黒のスニーカー。

髪型は明るい茶色（地毛）で、頭の上の部分がわんこミニミみたいなはねていて、肩上位の長さ。

このままでも正直十二分に女の子なのだが、それじゃ駄目だと言ってクルクルに巻かれたエクステを付けた。

前髪にはハートのピンを付けて、細めの黒カチューシャ。靴は黒のパンプスに履き替えた。つなぎでも可愛いかったが、女の子になるならスカートだろ、と羽恋が聞く耳を持たずふわっふわの黒いミニスカートを着用。黒で固めたシンプルスタイル。

「可愛い過ぎる……」

慣れないヒール、しかも十センチもあるためフラフラしながら立つ

ている羽恋はあまりに可愛いくて。

「本当か?!へ、変じゃないか!?!」

「全然。いや、むしろ可愛い過ぎて、オレが変になりそう」

「それはっ……い、言い過ぎだっ。あっ、別に嫌な訳じゃ無いぞ?」

「ふふっ、羽恋……?」

「ななな、な……んだ」

動転して目を回す彼をぎゅっと抱きしめる。

「……欲情、しちゃっや」

「っ尚輝……、抱いても、良いぞ?」

「羽恋?!」

「い、今は……女の子だから。尚輝の彼女だから……自由にして」

はれーん!!

君はいけない子だ、オレが自由にしたら淫らな子になっちゃっけど
良い?!

良いの?!

にしても綺麗な足だ、触りたい!!!!!!

抱きたいよ、凄く。

でもそしたら変態ってバレちゃう。今はまだあまりに可愛いくて抱
きついちゃったで何とかなるけど。何よりクラスメート抱いちゃ
気まずくなるでしょう。

「あれ?真田じゃーん」

げっ、クラスメートだ!!!!!!!!しかも羽恋ファン……………気まずっ。

「川島。と、友達?」

「そお。D組の伊沢いさわ 啓夢けいむ」

「どーも、真田……………尚輝くんだよね」

「え?何で知ってるの、名前」

「だって人気者だから。オレだって知ってるよ」

「あはは、ありがと」

オレが?人気者?

……………分からない。

「てゆうかさ、その子誰?」

「はじめまして、なのかな?」

「は、はじめましてだよ、他校の子だから。オレの彼女」

「ふえっ?!」

羽恋がびっくりして声をあげるが、そういう事にしておいた方が楽
そうだ。

『声、だしちゃ駄目だよ?ばれちゃうからね』

『あい、分かった……………』

ひっそりと会話をして二人にはにこりと微笑みかける。

「へえー、やっぱいたんだ。にしても、E組の柚子さん悲しむだろ
うなあ。彼女美人なのに」

「そうは言っても、オレは彼女よりこの子の方が好きだし可愛い
と思うから」

「うわ、オレもそういう事言ってみたいわ」

口を突き出しているなーいいなーと言い始めるが、実際は彼女なん
ていないからよく分からない。欲しいとも思わない。

まあ、今オレの腕の中でパンプスに耐えながらクラスメートにバレ
ない様に必死になってる、この子なら欲しくてたまらないけどさ。
それこそ、無理な話だし。

「ねえ、真田くん。彼女さんの顔、見ても良い？」

「だーめ。恥ずかしがり屋さんだし、きつと一目惚れされちゃうか
ら。見せません」

「ええ、ケチ」

「ケチ言いません。本当に恥ずかしがり屋さんなの。……ベツトで
は凄いいんだけどね？」

腕の中の負担が若干増える。どうやら羽恋が腰砕けになってしまっ
たらしい。

川島はベツト…?!といかにもな物凄くベタベタな反応をして、友
人くんはくすりと笑って、真田くんもお年頃なんだねと言った。

「それじゃ、お二人さん、お幸せに」

友人くんの方は余裕綽々。可愛らしい顔立ちしてるし、女の子にもモテるんだらう。多少の免疫もあるはずだ。

はいばーいと手を振って、川島をずるずると引きずっていく。ベンチに座らせて何かを思いついたかのように、ぽんと手をうって再び近づいて来たかと思えば。

「ねえ、その子男の子でしょ。真田くんてそっち趣味だったんだね」

え、まじで？バレてたっー！！！！！！

「伊沢くんて、同業者なの？」

な訳無いか、と思いつつ、それ位しかバレた理由が分からない。何のことかなと誤魔化してもかえって確信させるだけだ。だから開き直ってやろう、そう思っただけの対処だったのだが。

「うん、まーね。ピンキーってメイドカフェ知ってる？」

「まあ、名前だけは」

やはり同業者で正解の様だ。

「そこで女装して働いてるんだ。あのお店、女装率意外に高いって知ってた？」

そうだったの?!あそこってそういうお店だったのか!!

「もちろん、お客様には非公認だけどね」

なるほど、内緒で女装って事。

「彼女の事は内緒にしようとしてあげる。その代わりに、彼女さん、いつか一日だけ貸してくれない？」

「どうして？」

「スタイル良いし。稼げると思うよ」

「嫌って言ったら、バラすんだね」

ばちばちつと火花が二人の間で炸裂する。

この子なら確実にバラす。そう感じたから、きっと睨みつけると、彼は代わりに黒い笑顔で対応してきた。

とんでもない子だ。

「出来れば貸して欲しいかな」

「……………いいよ」
「っ羽恋……………」

オレの胸元に押し付けていた顔を上げて、にこりと弱々しく微笑む。

「あれ、君はF組の舞亜さん……………」

「だから、尚輝を困らせるな。オレはどうなっても良いからっ」

「羽恋……………勝手な事言わないで。それじゃあ羽恋が困るでしょ」

「こんな格好してたオレが悪いんだよ、似合いもしないのに。よく考えたら、こんなのおかしいのにオレが勝手に」

「言うな……………。おかしくないよって言ったら、今度はオレがおかしいけどね。でも、羽恋は可愛いよ。いや、男に可愛いはおかしいけど……………。参ったな、オレが混乱してきた」

あはははっ

こっちは本気で困ってるのに、伊沢くんは声をあげて笑い出した。

「いやあ、らぶらぶだね。分かったよ、それに免じて無条件で内緒にしたげる」

にこにこしあがって。
むかつく。

今度こそじゃあね、それだけ言い残して彼は立ち去った。本当むか

つく。

「羽恋、危険だからオレっ家行こう」

「でも、女装やめれば」

「勿体ない」

羽恋の言葉を遮って、いざお持ち帰り。

抱くのは我慢するけど、恋人同士としてのイベントを少し位、ね？

羽恋とデート、女の子の部（後書き）

羽恋とデート編、二話で終わらせなかったのに……何故持ち帰る（泣）

羽恋とデート、お持ち帰りの部（前書き）

羽恋とデート編、これにて完結。

最後かなり強引ですが、

終わった……。

羽恋とデート、お持ち帰りの部

真田家は立派な分譲マンションの、701号室にある。高校生の一人暮らしにはいささか豪華過ぎるが、ここは七月財閥なかつきの所持品で、社長の秋乃とは仲が良い為、無料で借りているのだ。

「おじゃまします」

羽恋が控えめな声でそう言うと、

「」「」「」

と何故かはもった声の中から……。

この声……もしかしてもしかすると。そう呟き、真っ青になってリビングへ凄い勢いで突っ走る。

「いらっしやい」

「尚輝お兄ちゃん会えてうれしい（棒読み）」

やっぱりお前らか……！！

「あつね、可愛い子が！生足きつれだな……ん？男の娘？うわー、

どろじようお兄さん欲情しちゃう」

「……侑斗にいの変態」

……相変わらず綺麗だけど変態だな、この方々は。

「な、尚輝、この人達、だだだ、だ誰だ」

そっか、羽恋って極度の人見知りでもあるんだ。
忘れてた。

「ん？綺麗で変な友人になったばかりの友人達だよ」

「そっか……。って、尚輝、若干目が据わってるぞ？」

「あははっ、そうかなあ？」

そんな事無いよ、と言う尚輝はやはり真っ黒な笑顔で対応してきて
とってもおっかない顔をしていた。

せっかくっ、せっかく羽恋といちゃこらしようと思ったのに……！

でも何だろうこの気持ち。何で嬉しいんだろ？

こんな変態で不法侵入者なのに。

「名前は？」

「……舞亜 羽恋……です」
「羽恋くん？かあわいいな〜！！」

とたんにぎゅむぎゅむ羽恋を二人で挟み撃ちハグ。
真っ赤になつて尚輝に助けを求めるけれど、とうの尚輝は頭を抱えてしゃがみこんでいる最中。

「なあなあ、この子とどんな関係？」

「クラスメート……」

「えー、クラスメートが女装してくれる？」

「……………オレがつ、勝手にしたんだ」

泣き出しそうな羽恋は、やっぱり自分が可愛いって理解してないみたいで。

見苦しいのにごめん、と小さく呟いた。

「だから、見苦しいとか、そんなのは無いから」

二人にぎゅむぎゅむされてる彼の頬をふわりと挟む。大丈夫、羽恋はオレの願いに最大限応えてくれただけだからね。
可愛いし……！

もう最高に、うん……！

「尚輝お兄ちゃん、羽恋ちゃん抱きたいか思ってるでしょ」

「思ってますん」

「嘘はやめるよ、むっつりですら無いくせに」

「あなたはどうせやましい事考えてるんですね」

「当たり前だろこんな可愛い純情な子。お兄さんが優しく抱いてあげるからおいぶっ」

「侑斗には変態だから駄目」

相変わらず無表情に言う侑里くんのドロップキックが炸裂。
多分この兄弟の力の差は

兄<<<弟

だと思っ。

常々思っ。

間違い無いとも思っ。

「あはははっ、変なのー」

声を上げて笑っ羽恋はどうやら打ち解けた様なので、とりあえずは
一安心。

けどオレは安心してられない。この兄弟の口封じをしないと。

「羽恋、水ようかん好き？」

「好き、だぞ」

「なら食べるね。侑里くと侑斗さんも食べますよね二人は手伝っ
て下さい」

どうやって家に入ったのか聞いて、それを脅しに羽恋に変態だってバラすなって言わないと。

「えくん、何で」

「何で？人の家に不法侵入しといて客ヅラするんですか？」

「……はいはい」

キッチン

「……んで、侑里くんが隅から隅まで鍵の形覚えて、作って侵入したと」

「はいそうです」

「そんな事出来るんだね」

「うん、尚輝お兄ちゃんごめんなさい……」

という事らしい。最早人間技じゃない気がするんだけど。どうやら事実のようだ。にしても……

侑里くん、今泣きそうな顔しないでくれる？普段表情崩さない侑里くんがそんな事したら楽しくなっちゃうんだよね。

「ひっ、く、ごめ……なさ……。今、両親が海外、行って……ず
っと、寂しかったから、また……尚輝お兄ちゃんに会いたくっ……」
「もう分かったよ。寂しかったんだね？」

こくり。

「ごめん。でもしちゃ駄目だって事は、理解してた。でも、」
「大丈夫です。その代わりオレが変態なのは羽恋に黙ってて下さい
ね？」

こくりく。

「それなら許します。さあ、水ようかん食べましょっ？」

ここからは後日談。
それからしょっちゅう遊びに来るようになった羽恋は、どうやら特殊な趣味にハマってしまっただけらしく。

「尚輝尚輝、メイド服とセーラー服だったらどっちが欲情する?？」

「どっちもしません!！」

「ええええええ」

女装趣味な羽恋。マンションの管理人さんには彼女が出来たと思われてしまい。

オレはと言えば。

「尚輝の為にしたのに」

「オレは変態じゃ無い」

とか言いつつ。

自重に大忙しです。

何ですか、この展開（前書き）

何でこうなったのか自分でも分かりません…

何ですか、この展開

「やば、シャープペン体育館に忘れた……」

時は放課後。場所は教室。

今日はたまたま筆記用具を忘れてしまった為、羽恋に貸してもらっていて、それをポケットにしまっていたのだが。

体育の時間に筆記用具を持って来いと言われていたので体育着のズボンにしまつて……それから、体育館で使つて、舞台の隅に置いたままだ。

ゆっくりとシャープペンの行方の記憶を追つて、羽恋ごめん……と小さく呟いて体育館へと向かった。

現在羽恋はバイト許可願いを提出する為に、あちこちの先生のもとへスタンプラリーに行つていて、当分戻らない。

先に帰つててと言われていたから彼には謝れないけれど、せめて戻つて来るまでに取りに行こう。

早足で向かつて、中へと入る。舞台は緞帳とんちようが閉まっている、って事は多分演劇部が練習に使っているのだろう。

練習中に申し訳ないけど仕方ないかな、と思いつつ、ストレッチをしているバスケット部の邪魔にならない様に隅を通り舞台へ歩いていく。

階段を上り、若干暑苦しい中へと入ると何故かむさ苦しい男子生徒が群がっていた。女子生徒もちらほら。

まあ気になるは気になるが、そんな事よりシャープペン。

「すみません、シャープペンの忘れ物ありませんでした？」

「あっ、これですかぁー？」

舌つ足らずなしゃべり方をするショートヘアーの女子生徒が持っていたのは、装飾品の付いていない無難な物。

紛れもなく、探していたそれだ。

「はい。ありがとうございます」

「えっと、F組の真田先輩ですよねっ？」

「そうですけど？」

そう言つと何故か女子生徒から歓声があがる。

「ファンですっ!!」

「かっこいい、うっそん」

「舞亜さんとセットじゃないのが残念ね」

え？何でこうなっちゃうのっ?!

よく分からない。

「真田つ、貴様最近馴れ馴れしいぞ」

「……………は？」

「舞亜と馴れ馴れしいぞって言ってるんだー!!」

「ええええええ!!!」

状況が飲み込めない。

襟首を掴みあげてくる坊主頭と、品なんて全くない金髪頭が睨んでくる。

侑斗さんの柔らかな金髪とは大違い。

率直にそう思った。

「こらその二人。うちの商品に手え出すんじゃ無いわよ」

突如凜々しい声が。

その声に制されてすみませんと謝る二人。

掴みあげられていたのほっとしたはしたが、“商品”という言葉には引つかかった。

その声の発生源に振り向くと。

「ハアイ、真田くん」

「ゆ……………柚子さん?!」

驚いた事にそう言ったのは柚子で、

「ばれちゃったら仕方ないわね。いつも稼がせてもらってるわよ」
「っ……………!!」

オレが言葉を失ったのは仕方ない事。

にやりと笑いながら言う彼女のそばには自分や羽恋、先日会った伊沢、物腰の柔らかさと女性みtainな綺麗さで有名な生徒会長の瑞穂^{みづほ}さん、DSでオレサマな元生徒会長、薫^{かおる}さんなど、校内屈指の綺麗や可愛いで名の通っている（オレ除き）方々の写真がずらりと並んでいたのだ。

びっくり、現場発見！！

「これは、一体……」

「うふ、ちよつとした小遣い稼ぎと栄養補給よ」

綺麗な顔をにいと歪めてそう言う柚子には、普段のお嬢様オーラは見当たらない。

「でも柚子さんは美人なんだから、自分でも稼げたんじゃ無いの？」

「いやーね、私が美人なのはとくに知ってるわよー。でも私が体張るよりもあなた達がいちやこらしてる写真の方が売れるのよねー」

「……お金に困ることって無いんじゃない？」

「親のスネかじるなんてイヤよ」

73

何て事だ。

美人でおしとやかな筈の柚子さんは、裏では勇ましい売人だったなんて。

「さつてとお、残りは後八枚よ。買った買った」

柚子の一言でどんどん無くなる写真達と、どんどん増えるお金達。八枚の写真は一瞬にして完売し、お開きになった。

それにしても、何でこんな商売始めたの？

その問いの答えは、たまたま行事の時に撮った写真に薫さんと瑞穂さんが写っていて、それを欲しいと言われたのがきっかけらしい。

「いい商売よ。ばんばん売れてくもの。前までは薫さんと瑞穂さんが一番売れてたけど、最近はあなたと羽恋ちゃんのセットが人気ね。ベタベタしてくれるんだもの、いくらでも素敵な写真が撮れるわ」

伸びをしてブレザーの内ポケットに手を突っ込む。

何をしているのかと思ったら、そこから出てきたのは一枚の写真だった。

そしてそれは 。

「……………あれー？」

羽恋にイチゴジャムパンをあげるしてもらっているもの。

「五百円が68枚。はい、計算」

「三万四千」

「大正解。一昨日ね、この写真を8枚現像して持って行ったのよ」
「……うん」

「そしたら三十秒も経たないうちに売れて。昨日は20枚。それも二、三分で完売。今日は二倍の40枚持って行って、それも五分で完売。これだけで三万四千円の売上よ。供給が需要に追いつかないのはいつもの事だけど、これはかなりね。びびったわ」

この荒稼ぎ方法を思いついたあなたにびびるんだけど？

柚子の横顔は夕陽に照らされて赤く染まっている。

微笑む姿はどう見てもただのお嬢様にしか見えず、実際はそうでは無いのだという実感が全くわからない。

「あなた達のおかげでかなり稼げたわ、ありがとう。……という事で、紅茶でもご馳走しようかと思うんだけど、この後どうかしら」

柚子の提案に乗る事にした尚輝は、現在生徒会室の前にいる。何故紅茶をご馳走する為に生徒会室に来たのかというと、

「私、こつ見えても風紀委員だから。ここは自由に使わせてもらってるの。さあ、入って」

彼女の言葉に甘えて入る、は良いのだけれど。

そこには。

「じ、……………！」

薫さんと

瑞穂さん……………。

が。

「あー、お邪魔でしたあ」

とか言いつつ、薄型カメラでバツチリ現場を抑える。
ここでぽかんとならなかった彼女は、何と云うか、

多分、こういう現場慣れをしているのだろう。

「ふん。仕方ない、続きはオレの家で」

「ま……まだするんですか……」

「お前だって満足してないだろうが」

この二人って、

こういう関係だったのか……。

びっくり、現場発見！！（後書き）

曖昧な終わり方ですが
決して手抜きではありません、わざとです（笑）

> i 2 9 1 2 4 — 8 1 9 <

気が向いたwwので、一人紹介。

連動 れんどう 瑞穂 みずほ

身長：174センチ

髪色：亜麻色

敬語キャラ、女性の様な綺麗さを持っている。

比等学園生徒会長。

母が日本人、父がイタリア人のハーフ。薫に限定してかなり淫乱。
二年の首席。

デジカメとDSとDM

彼女が淹れてくれたのはアップルティー。他にも茶葉があると思っ
ていたが無かったからこれでという事らしい。

「……美味しい」

「柚子さんはお茶を淹れるの、上手ですよ」

「あらありがとう。誉めたって何も出てきやしないわよ」

誉められ慣れているのだろう。

ぶっきらぼうにそう言って、紅茶を再びこくりと飲みだす。

カップを音も出さずに置く様子なんかはやはりお嬢様で、出来れば
オレの中のお嬢様像をこのまま壊さないで欲しいのだが。

「それで？瑞穂は薫元会長にまた掘られてたのね」

「ぶっ」

やはり無理なようだ。

紅茶を吹き出さない様に口を抑えるのに必死なオレは、当然薫さん
が瑞穂さんの唇にキスを落とした事に気付けなかった。

知ったのは、後日柚子さんのデジタルカメラを見せてもらった時。

「こいつが物欲しそうな顔してたからな」

「っ……薫さん、無理やりそうさせたのはあなたでしょう！ー！」

「ちよっと触ったら興奮しだしたのはどこのどいつだ、あ？」

泣き出しそうな瑞穂さんはとんでもない量の色香をむんむんと、多分無意識に放出させている。亜麻色の髪を肩からすべらせて俯くその様子が気にくわなかつたのか何なのか、指先でくいつと顎を上に向かせた。

「言いたい事があるなら言えよ、瑞穂。……言えないなら、無理やり言わせてやるのか？」

「か、か……かおるさっ」

瞳に涙をいっぱいためて泣くのを我慢するのとか、もうとてつもないくうふふな光景らしく、柚子さんがくすくす笑いながら撮影会開始。

いや、ね。らしくとか嘘ですごめんなさい。

オレも素敵だと思ってましたてゆるか思ってる！！

本来は止めないといけないのだろうが、今のオレには無理。

だって、だってさ！！

オレ、変態だよ、凄く。

自覚はしてるんだって。

そんな訳で。

止めません。

「ごめんなさい……許し駄目だ。ろくに自分の言いたい事も言えない子には制裁が必要だよな？」

今夜はうちに来い。

“オレの気が済むまで”痛くしてやる。

耳元で囁く様に、誘惑する様に、薫さんは意地悪に言う。

ええええ、待って、その痛みに限界はあるの、無さそうな気がするのはオレだけっっ?!

「はい……。分かりました」

「よし」

いやいやいやいや!!!!

オレが口出し出来る事じゃ無いけどさあ、瑞穂さん早まんない方が
良いって絶対に。

「薫さん……キスが欲しい」

「お前はどんだけ欲求不満なんだ。夜嫌だからやめてって言っても
やめない位の事はいくらでもしてやるから、我慢しろ」

「無理です。……あなたのっ、せいで」

「我慢出来ないならどこをどうして欲しいのか、具体的に言わない
と分からないぞ?」

うわぁぁ……意地悪だ。

先代生徒会長ってとんでもないドSって聞いた事あるけどさ、これは……。

たまらない!!

でも。

何でそんなに瑞穂さんは嬉しそうなの？

Mなの?!

「うふふ、そう。Mなのよ、瑞穂は。……はあ、素敵ね、素敵よ。このテンションでいけば世界一怖いバンジージャンプも笑って飛べるわ!!」

やる!!

彼女なら笑って飛ぶ!!

何か確信しちゃう。

でもオレだってこのテンションでいけば世界一怖いジェットコースターだって乗れちゃうよ!!

あ。

……………笑っては無理かも。
だってオレ高所恐怖症だもん

くだらない事をつらつらと考えていたその時。

「尚輝っ、いるかあ？」

え？

「羽恋」

何でここに？

「尚輝が柚子さんと生徒会室に行ったって、聞いたから……。まだいるなら、一緒に帰ろうと思って……。」

羽恋っ……

「そうだね。そろそろ帰ろうか。あ、シャープペンありがとう」

刺激的な場面をガン見した後だから、何か和むなあ……。
周り変態ばっかだし。
オレもだけど。

ふわふわの明るい茶髪をくしゃりと撫でると、嬉しそうに目を細める。

「んむ。帰る」

「それでは。柚子さん、紅茶ありがとうございます。薫さんも瑞穂さんも、お幸せに?では」

デジカメとDSとDM（後書き）

デジカメ少女は腐女子でした。

今更（笑）

それぞれの夜（前書き）

健気な羽恋と鈍感で変態な尚輝のすれ違い？の話し。

それぞれの夜

羽恋 side

『あははっ、羽恋って寂しがりなの？』

「んっ……最近、尚輝とよく話すし、一緒にいるからな……夜、無性に寂しくなったりは……する」

『ふふ……羽恋は可愛いね』

電話先のその声にどきり、と心臓が鳴る。

尚輝にそう言われると、オレはいつもおかしくなる。

いつからかは……分からない。

分かっても意味無いしな。

それにな。尚輝に“恋愛感情”で好きだなんて言っても困らせるだけだろ？

だから、フタをする。

オレの訳分らない感情に。

「……尚輝は」

オレが好き？

そんな事、言える筈が無かった。

そんな事を言えば、尚輝は好きだよと言っ。

友達として。

オレはそんな答え、
求めてない。

だから言わない。

『うん？』

「……お休みなさい」

『お休み、羽恋。』

ああ、待って、まだ切らないで

「な、何だ？」

好きだって、言って欲しい。たとえ、友達って意味でも、その言葉
が欲しい。

先程とは明らかに矛盾した願い。

訳、分からない。

ちゆ

『お休みのキス。何だか、今の羽恋おかしかったから。オレの出来るせめてもの慰め、かな』

「……………ありがとう……………」

震える声で必死に言葉を紡いで。

『羽恋……………泣きたくなったら、いつでも電話して。何処にでも行くから、ね』

「ん……………あ、ありが……………」

優しいな、愛しい声はお休み、羽恋。

何度も何度もオレの名前を読んで、慰めて、お休み、と言って。

そして。

『羽恋が大好きだよ』

とろけそうなほどに、甘く甘く囁いて、もう一度キスをくれた。

こんなの、反則だ。

……また、苦しくなっちゃうよ……。

尚輝 side

はあ〜。

ベッドでごろごろしていると、自然とため息が出た。

……羽恋が凄く可愛かった。

本当は、ぎゅーっしてちゅーして辱めてあげたいんだけどね？
会えないし、ちょっとおかしかったし。

んじゃ電話でいちゃいちゃ、ってのも何かあれかなって。

それにしてもさ。

薫さんと瑞穂さん……どうなっちゃったんだろ。

だって、あんな会話しちゃって。

薫さん鬼畜DSだし、瑞穂さん信じられないDMだし。

いじめられてめちゃくちゃ喜んでたよ、瑞穂さん。

瑞穂さんファンが可哀想というか、どんな反応するのかぜひとも見
てみたい！！！！

……きつと、今頃沢山いじめられよろこんでるんだろな。

簡単に想像出来るのがある意味悲しいよね？

「ふぁ……」

参った。

何だか、興奮してきちゃったよ……。

DSとDMの夜(前書き)

ちよいしリアス、

うふふなイベントは起きません(笑)

ドSとドMの夜

瑞穂 side

比等学園は比成学園と違って寮生活が出来るようになっていた。
薫と瑞穂は寮生活をしているので、うちに来いとはつまり部屋に来いという意味。

「お……おじゃまします」

薫さんには、七時きっかりに来いでないと焦らすと言われてしまったので、一秒単位もズレない様に部屋へと入った。

鍵は開けてある

愛想の欠片も無いメールの通り、ドアはあっさりと開いた。
けれど、薫さんの姿は見当たらない。

じ、焦らしプレイもう始まってたりして？

「始まってねえよ」

薫さんっ、何処にいたんですか!!
振り返り際にそう言おうとして。

「っ…………!!」

無理だった。

あまりにも衝撃的な姿に言葉が詰まる。

「か、おるさ…………ん」

「何放心してんだよ」

薫さんは…………

薫さんは…………。

バスローブを着ていた。

「何でバスローブなんですか…………」

「決まってるだろ、風呂だ風呂」

不意打ちだから、ほら不意打ちだから。
ときめいても、良いんですよね？

首筋を伝う雫。
濡れそぼった髪の毛。
相変わらず冷たい双眸。
がばりと開いた胸元。

余りの色香にくらくらします……。

どさりと本革のソファ―に腰を下ろして、長く綺麗な脚を組む。
肩にかけているタオルでわしわしと深緑の髪を拭いている横に腰を
下ろすと、何故か薫さんはとんとん、と指で自分の膝を指した。

「え？」

「座れ」

えっとつまり……

「オレの上に来い」

めめめめっそうも無い！！

「オレが来いつつてんだから素直に聞きあがれ。そんなにオレが嫌
いか」

「それは無いです……！」

「知ってるからさっさと来い」

ですよ、知ってますよねー……。

では無く。

「っ……」

そんな事しちゃったら……

オレは確実におかしくなります。薫さんは意地悪な顔してるんだろ
うな。

そう思ったのに。

薫さんは、悲しそうに整った顔を歪めていた。

……忘れてました。

あなたは凄く感情的な方でしたね。

「……何を躊躇してるんだ。オレがお前の気持ちを受け止めないか
らか」

違います。

オレの身勝手です。

それにオレは知ってます。

……あなたは、とても慎重な方だって。

“オレの為に”世間体を気にしている事だっけ知っています。オレの気持ちを受け止めてしまったら、何時でも何処でも傷付く事になってしまうから……わざと、受け止めないんですね。

『瑞穂が大好きだから、オレはあえて受け止めない』

柚子さんにそう言っているあなたは苦しげで、つらそうだった。

同性同士であんな事やこんな事……位なら、セフレだって割り切る事が出来なくもない。

……かなり無理があるけれど。

でも、オレの恋愛感情を受け止めてしまったら……

同性での恋愛を認めた事になる。隠し通すにしても、さらけ出すにしても瑞穂がつかなくなるからと……そう言ったあなたを見つけた時。

悲しくてつらくておかしくなったと同時に、あなたの真の優しさに気付いた。

あなたがわざと意地悪をする事にも気付いた。そんなあなたは、たまに優しくなりますよね？想いを受け止めない、罪滅ぼしのように。

だから嬉しいけれど、悲しくもあるんです。

「……………って、……………だ……………」

「……………何だ？」

「好きって、言っただけさ。」

口先だけでも良いから。

そしたら……………悲しい気持ちは忘れるから。

せめて、欲しい言葉を下さい。

「……………そしたら、我が儘はもう言いません」

「嫌だ」

「っ、どうして」

「我が儘言わない？ふざけるな。そんな事になったらお前を抱けないだろが」

おっかなすぎると瞳で睨まれる。

「……………やっぱりつらいよな」

かと思いきや、しゅんと沈んでしまっ。

「分かった。オレの気持ちに折り合いを付ける。オレもお前を傷つけるのは不本意だ」

ごめんな。

そして急な謝罪。

余計悲しくなつて、自然と視線が下がる。
唇をぎゅっと噛んで気持ちを紛らわせて。

「っえ？」

何故か体が傾いて、そして視界いっぱい広がる薫さん。
鼻先をくすぐる控えめな薔薇の香り。

「身勝手って事は分かってる。早めに折り合い付けるから」

オレは、

薫さんに膝枕をされていた。

本当に身勝手だ。

瑞穂がオレを好きなのは良く知ってる。

……オレも瑞穂が好きだし。

でも。

オレ達には世間体と常識って壁がどーんと立ちはだかってるんだ。

そんな事気にするなんて馬鹿ねえと柚子に笑われたが、こればかりはどうにもなんねえ。

「薫さん。あんまり悩まないで下さい。……勝手な事言ってますみませんでした。薫さんが困る事言ってるって、分かってるんです。分かってるんですけど、悩まないで欲しいんですけど、でもオレはあなたが好きで仕方な「好きだ。……お前が好きだ。だから、待ってくれ」

すげえびっくりしてるし。

まあそうだろうな。

オレがお前に好きって言わない様にしてた事、薄々気づいてたみたいだし。

「……分かりました。それで十分です。我慢、出来ます」

「良い子だな」

本当はつらくて仕方ないんだろ？オレのせいで……ごめんな。
泣きそうなの、必死で我慢してるんだよな。

「悪いのはオレだ。泣け」

何だかんだ言って、逃げてるのはオレだって事もよく分かってる。

……そうだ。

何とかすれば良いんだ。

せめてこの学園内の常識を覆してしまえば良い。
瑞穂を、オレを変だと言う奴を、何とかすれば良い。

そんでさっさと折り合いを付ける。

「ふえっ……う、く……」

ぼろぼろでっかい雫を流して泣く瑞穂。
本当はこんな姿見たくない。

笑ってる瑞穂を見ていたい。

オレを翻弄させる常識が憎い。
常識を作り出した世の中が憎い。

瑞穂を泣かせるオレが憎い。

だから。

絶対に、革命を起こす。
常識を覆す。

「折り合いを付けたら、抱かせて」

泣きじゃくっている瑞穂はこの言葉が聞こえなかったようだ。
独り言だから良いけど。

「優しく抱くから」

折り合い付けるから。
それまで、オレを好きでいてくれな。

やっぱり羽恋は可愛いよね。

「なおきい……」

教室に入るなり泣き出しそうな羽恋の声がオレを迎えた。瞳をうるうるさせて眉根を寄せる。

何があつたか分からないけれど、誰かがこんな可愛い羽恋を朝から見せてくれたんならその人に感謝と敬意を示す……じゃなくて、そいつはぎゃふんと言わせないとね？

前の席にすんと腰をおろした羽恋の頭をなでなで。

「んー……」

「羽恋、どうしたの？言える事なら言つてね」

「ん……む。あ、あのな。えと、えつと……引くなよ？」

「引かないよ、大丈夫。言つてごらん」

言つてごらん。場合によってはハグしてこよ……蹴つ飛ばして来よう。

「実は……へ、変な夢見たんだ」

「夢？」

尚輝に嫌いつて……言われる夢。

羽恋がそう呟いた瞬間……。

「へあつ?!」

ぎゅっぎゅっとうと抱きしめずにはいられなかった。

「羽恋……オレが好き？」

「なななんだよっ……あひっ、くしゅぐったあ……うう、好きだぞ。好きだから、悲しかったんだ」

羽恋可愛い可愛い!!

夢？羽恋の夢にオレが出たの？それだけでも良いのにオレに嫌いつて言われて悲しかった？

「ありがとう嬉しいよ。お礼に何かお願い聞いてあげる」

「お願い？何でもか？」

「うん」

ああああ……あんまり見つめないで。心臓痛い。

「ん……と。ちゅうして。口にじゃないと駄目だ。……出来れば、いっぱいが良い」

ぶっ！！

羽恋ちゃん羽恋ちゃん。

そんな事言ったらお持ち帰りしちゃうよ。しかもちゅうだけじゃ終わらないよ？

ねえ良いの？！

良いんだねやったあー！！

「あつ……駄目か？……だよ、な。無理言つてごめん」

はいもういいです。オレ決めた。変態つてばれても良いや。

「誰が駄目なんて言ったのかな？羽恋が望む事ならなんだってしてあげる」

そしてこそりと耳元で。

「キスだってそれ以上の事だってね」

「ふあうっ……」

「キスは唇だけで良いの？体にはして欲しくない？ここは？」

「んっ……！！」

「感じちゃうんだね」

薄いシャツの上から胸の突起を軽くつまむとあからさまにびくりと肩が跳ねる。

「それじゃあここは欲しくない？」

「ひあん」

「やっぱり感じちゃうんだね。可愛い体……。あんまり反応するとオレまで感じちゃうから勘弁して」

下半身の膨らみをするりと撫でて羽恋の興奮を限界まで煽る。

「ほしい……なおきが欲しいっ……羽恋、なおきといっぱいぐちゃぐちゃになりたい」

「良くできました」

「ふぁ？えへへっ」

びろり〜ん

「ななななんだよ今の」

「羽恋があまりにも可愛いからついつい。えっちな事言う羽恋も可愛いかったから……。もう一回言って」

「嫌だ！！」

「ねえお願い。いっぱいぐちゃぐちゃにしてあげるから」

「……どれ位？」

「いっぱいはいっぱいだよ。羽恋に沢山あんん言わせてあげる。

体力が続く限りずーっと一緒にぐちゃぐちゃ」

「あうう……。そんな事したら死んじゃいそうだな」

何を想像したのかさらに赤面。

すかさずびろり〜ん。

それにふくれた様子をさらにびろりろり〜ん。

「尚輝っ、怒っちゃうぞ」

「羽恋が怒っても可愛いだけだもーん」

ああ楽しい。羽恋ファンの視線も廊下の視線も痛いけど、楽しいものは楽しいんだよねえ。

「ふーんだっ」

「ふふっ。　　ねえ羽恋？」

「何だ？」

「土曜日、遊ぼっか」

「ん……。んむ、分かった」

教室と廊下の騒がしさはこの際無視無視。

今オレが考えられるのは、羽恋の事だけだもーん、なんてね。

最近みんな熱出すなあ。(前書き)

ネタが無い訳じゃ無いんです、ええ。あるはあるんです、過激です
が(笑)

■最近みんな熱出すなあ。

午後はひたすらあらゆる教科のプリントをやらされた。

最近女子生徒が痴漢の被害に合う事が増えているらしく、先生達は緊急職員会議中である。もちろん監督の先生なんて誰一人としていない。それでも真剣にプリントに向かうのは、流石県下トップの進学校と言える。

比等と比成の違いは寮が有るか無いかだけでは無い。

進学校か進学校で無いかにもある。

教室に響くのは時計の針の音とシャープペンシルをカリカリやる音のみ。

疲れたな……。

そんな中、呑気にあくびなんかをしているのは尚輝である。

東で出されたプリントをとくに終わらせて、やること無いなあどうしよう、問題が解けなくて焦っている人が知ったら睨まれそんなことをぐうたら考えていた。

銀縁の眼鏡をかちやりと押し上げてペン回しをし始める。

土曜日、楽しみだな。

羽恋とは最近よく遊ぶけど、キスの約束は初めてだし。いや、当たり前なんだけどね？

どんな反応するかな？

可愛く喘いでくれたら嬉しいけど本人には言えないし。成り行きに任せるしか無い。

とりあえずさっきの反応で感度が良いのはよっく分かった。
まあ行ける所までは行かせてもらっけどね。

「すーすー……」

そんなこんな考えていると羽恋が小さな息使いが聞こえる。
どうやら完全におねむの世界に行ってしまったらしい。

「んむむ……」

どろじょう。

寝顔見たいかも……。

思わず舌なめずりをしてしまう。

よっし、我慢はやーめよ。

という事で、少しだけ身をのりだして覗き込む。

どんなかなあ、きつと可愛いよなあ……。

え……………？

羽恋？

何故かそこには、真っ赤になって泣き出しそうな羽恋。

嫌な予感がする。

不安にかられてがたんと席を立ちおでこに触れる。

「熱い……………」

おでこも、手も脚も熱い。
全部全部熱い。

羽恋は凄い熱だった。

「保健室行こう」

「でも……………」

「でもじゃ無いよ」

「……………でもプリントが」

「羽恋、殆ど終わってる」

「違う。尚輝が……………」

尚輝が、先生に怒られちゃったら……。

参ったな、こんな時まで人の心配？

んー…… 本当はこんなえらっそうな事言いたくないけど。
納得させるためなら。

「羽恋、オレを誰だと思ってるの」

「ふあっ…… 無駄な心配でした」

「うんうん。だから保健室行こうね。だっこしてあげるから。……」

土曜日遊ぶんでしょ？ 体調崩したままなら、無理だよね」

「ん…… あい」

羽恋がこくりと頷いたのを見て、膝の下に腕を差し入れる。

「っ、おんぶじゃないのか」

「うん。ほら、腕を首に回して。行くよ」

よいしょと。

羽恋が腕を回したのを確認してからゆっくりと立ち上がる。
茶髪の癖っ毛が首をくすぐる。体はやっぱり凄く熱くて。

本当につらいのだろう。首をだらりとさせて、涙をぼろぼろ流している。

「っ……、熱い……あついよ……」

今朝は大丈夫そうだったのに……何で。

「つらいね。……熱いね。でも大丈夫。楽になるまでオレがずっとついてあげる。楽になったら沢山キスしようね」
「んっ、する。いっぱい……」

そして唐突に。

尚輝が好き、大好きだ……ずっと、オレといて……オレとして……。

多分無意識にそう呟いていたが、その言葉は尚輝に届かないままは
かなく消えた。

羽恋の切実な想いは届かないまま……。

アフターイベントは保健室 (前書き)

少しぶりです。先生の初絡みは保健室の先生になりました。
個人的に結構好き(^ w ^)
残念なイケメンは好物です。

アフターイベントは保健室

「真田、と……舞亜か。どうした」

「羽恋が凄く熱出したから連れてきたんです」

「ほお……そうか」

保健室の志摩先生はベッドをぼんぼんとやって座れよとすすめる。すすめられるがままに羽恋を姫抱きしたまま腰をおろすと、体温計をぶん投げてきた。

「志摩先生、危ないです」

「体温計つてやれ」

無視かいな。

まあこういう人だね。

志摩先生はセミロングのくせつ毛栗毛をポニーテールにまとめて体調確認の用紙を出した。

しなやかな指も動作も素敵な美人先生。結構ツボだったりする。

「なあ真田」

「何ですか」

「舞亜とそういう関係なのか」

「ぶはっ?!」

何を言い出すかと思ったらこの人は。

「あっはんは済ませたの?」

「いやいやいや何でそうなるんですか」

「だっってお前手早そうなんだもん」

大当たりです。

流星スペシャリスト。

……じゃなくて。

「そんな関係じゃありませんよ。何でそうなるんですか。……羽恋、熱計るね」

「……ん、ありがと……」

ワイシャツのボタンを上から三つ解放して体温計のスイッチオン。脇の下にするりと滑り込ませて腕をおさえる。

羽恋の小さなごめんなさいの声に笑顔と頭を撫でる事で応えて、志摩先生の言葉を待つ。

羽恋の少し白めで柔らかな肌が物凄くいろんな意味で目の毒だけど我慢する。触りたいけど我慢する。すつごく我慢する。

「だって校内で有名じゃねえかよ。真田と舞亜が最近凄く仲良いで。そういうのが好きなタイプの女子がかなり騒いでっぞ」

……知らなかった。

「でも仲良いつて言えば先代生徒会長と現代生徒会長もじゃないですか」

「まあな。でもあいつらいちゃつかねえもん」

確かにそうかも。

「つまんねえ」

「生徒を不純な目で見ないで下さい」

ふと体温計を見ると、数字がぐんぐん上昇していく。

37.5 37.8 38.1 38.3.....

「気にしてるのか」

「何をですか」

「性別を」

「.....」

つくづく分からない人だなあ。

「好きになつた相手が同性だから気にしてるのか」

「.....はい？」

「そうかそんなに気にしてるんだな」

だから何でこの方は人の話し聞かないかな。

「好きなら性別の壁なんてたいしたこと無いだろうがよ」

「いえ大分たいしたことですよ」

だからオレは悩んでるんだし。好きになるのが必ず男だから。

そう思うけれど志摩先生に言われると何だかたいしたことじゃ無い

ような気がしてくるから不思議だ。けど言葉では認めないよ。じゃないとこの人は確実に調子に乗る!!!!!!

「そんな事無いぞ」

「有りますよ」

「無い無い」

「有りま」

ピピピピッ

ある意味ジャストタイミングで体温計が鳴る。志摩先生の相手に若干疲れを感じてたからほっとする。

そこに表示された数字は。

「39.5……」

「早退だな」

そっか……早退か。

羽恋がない学校なんてつまらない。やだなあ……オレも帰っちゃおうかな。

「それはダメだぞ」

「何で考えてる事分かったかはあえて突っ込みません。でも語尾の星マークは今すぐ撤回して下さい」

「えー」

「いい大人がえーとか言わないで下さい」

何でこんなに残念なの、何でこんなに残念なイケメンなのあなたは。ほら羽恋がじつとりした目してるよ、気づいて!?

「まあとにかく舞亜は早退。家に誰か居るか?」

瞳をうるうるさせて首を横にぶんぶん。

「誰も居ないのか……仕事?」

「は、い……ふたり、とも……し……ごと」

なら仕方ないな。ここに居る。

オレの膝に跨っている羽恋の頭をわっしやわっしやしてにこりと笑う。

ほんと、こっぴどい表情は様になるのに。

「真田は……プリント終わってるよな」

「はい」

「ならここに居れば良い」

「え？」

「だって舞亜が悲しそうな目してんだもん。可哀想だろ、お前が帰っちゃ。……なあ舞亜？真田居た方が安心するだろ。居てっってお願いしてみたら？」

志摩先生の言葉に火照った頬をさらに火照らせて。

「なおきい……」

「うん？」

瞳に涙まで浮かべて。

「帰っちゃ、や……」

オレのシャツをギュッと握りしめて、お願いと呟く。

うん？オレ？

惨殺されました。

アフターイベントは保健室（後書き）

志摩先生、今後もちよくちよく出してハーレムに引き込もうと思
います、はい。

その頃のクラス

その頃教室は。

カリカリカリカリカリ、

カリカリカリカリカリ。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ。

ひたすら書く音書く音。

最初はそれだけだったのだが。

「舞亜と真田って似合うな……」

誰かがぼつりと独り言を漏らした後からはもう、カリカリカリカリカリでは無く、

ざわざわざわ……という状態だった。

「舞亜様可愛いしなあ」

「真田綺麗だもんな……」

「呼び捨てるな、様付けろ様を」

本人達の居ない場では、崇められちゃったりする。

ちっちゃくて、少し勉強が苦手でスポーツ万能で可愛い羽恋。少しとは言っても、全国トップクラスの学校。一般常識で測ろうものならば、その頭脳はずば抜けている。

背は高めで成績超優秀でスポーツ万能で容姿端麗な尚輝。

男女共々好かれていて、本人はその事を全く気づいていない。どうやらそれもツボらしい。

「……オレさっきの写メったぞ」

「くれ!!」

「いやオレだけに」

「駄目だオレが」

「やらん駄目だ」

らしく無くぎゃんぎゃんと騒がしい教室。注意された事は言わずとも分かるだろう。

「みんな静かにね？」

しかもそこに現れたのが学園のアイドル的存在の理事長、比等とあれば。

「理事長っ……っ！」

理事長親衛隊が存在して、学園の生徒の八割は加入している。このクラスの生徒も当然。

「奥さんいないんですか」

「好きな人はっ」

「同居とかは?!」

「いません、してません。みんなプリントは終わったの?」

「「終わりましたー」」

「そう。さすが」

理事長の笑顔に悩殺される生徒が続出した頃、授業終了のチャイムが鳴った。

そこから少し時間を遡った保健室は。

盛ったやつ、ナイスとか思っていないんだからっ！

「真田、鼻の下伸びてるぞ。舞亜可愛いもんなあ？」

「へ？……いやいや、あなたには言われたくないですよ」

「えー」

「……………」

相変わらず子供みたいな発言をしまくる志摩先生。

まあ、好きなんだけどね。……こんな事絶対言わないけど！！

あれから羽恋はすぐに寝ちゃった。オレの自制心は何かかんとか間に合ったよ。……ギリギリだったけどね。

志摩先生の手元にある体調確認用紙には、目立ってやばそうな所は無い。あえて言うなら、昼にいちごのジャムパン一個しか食べてない所だけ。確かにそれは気になってたんだけど。

やっぱり体調悪かったんだ。早く気付けば良かったって思っても手遅れだけど……。

「なあ真田」

「はい？」

「媚薬もられちゃった場合どうすれば良いんだろっな？」

「ぶっ！ー！」

ちよっと、ちよっとちよっと！ー！！！！

「何かさっきからそわそわしてるとは思ってたんですけど……まじですか？」

「おうおう、本気と書いてました」

……どうしよう。それってつまり志摩先生が淫らになるって事だよ
ね？

もんもんとオレがやましい事を考えてる間にも体に熱が帯びてきて。

「どうすんですか」

「どうすっかなー」

どうすっかなー、じゃ無いですよ！！！！何でそんな呑気なんです

か貴方は。

貴方が淫らになるって事はオレの自制心が外れるって事なんですよ？！何とかして下さいいいいい！！！！

「にしても何で媚薬なんてもらったんですか？」

「……んー、分からん。今までも何度かあったんだけどな。それでも耐えられる程度のもんだった。でも……」

「で、でも？」

「今回は無理そうだ……」

羽恋が寝ている所の逆にあるベットに腰を下ろしていた志摩先生とオレ。こてん、と体を傾けられたら必然的にオレの肩によりかかる事になる訳で。

「っ……」

どうしよう。ねえどうしよう。どうしろって？耐えろって？

無理だよ、そんなん。

とくん、とくんと心臓が高鳴っていく。

はあ……。もう、なるようになってよ。
て事で。

「っ？っ真田??」

急に視界が横になったからか志摩先生が珍しく動転する。

「横になってた方が良いと思います。オレももらった事あって。そんな時はとりあえず横になって気持ちを落ち着けたんで」

「なるほど……ぎゅっ」

「はい?!?!」

「いいだろ?ぎゅっ、位」

にしても刺激が強すぎるけどね!!

そのまますりすりしてくるこの人はもうなんて言うか……。

オレには先生に見えなくなってきた。何て表現すれば良いか、分からないけど。

すっごい、いじらしい。

「っ…………ん、」

「ちよ、大丈夫ですか？」

大丈夫、じゃない、かも？

オレの腰に抱きつきながら、初めて余裕が無いつて言った。て事はね？

まじで限界が近いんだと思う。

「さ、なだっ…………どうしよ…どうしよお…………」

ついには瞳いっぱい涙をためちゃって。

うわあどうしよう、襲いたい……………！！喰べちゃいたい。

もっと、もっともっと淫らに…………。

いっつも余裕たっぷりの人がこんななったら…………そりゃ、もうたまならないってば！！

見上げてくる濡れた瞳はどんどんオレの欲をかきたててくもんだから困った困った。

「志摩先生、落ち着いて」

自分の方が大分余裕が無くなってるのは、そんな事を言うオレ。落ち着いてはオレだよ。

「だって、これじゃ、ここか、ら出れないし…………っ」

ちよ、オレのシャツをぎゅってしないで下さい！！じじじ自制心が飛びやすくなっちゃうじゃないですかああ……………。

「まあ確かにそうですけど」

余裕ぶって志摩先生の髪をふわふわと撫でる。

本当は余裕のよの字も無いなんて…………言えない…………！！

「でも……オレ、お前の事……好きだもん。媚薬なんて……どうでも良いよ。お前と、できれば」

そしてこれだ。

この人、知ってるよ、オレを喜ばせる方法。

「志摩せんせ……？」

オレがびっくりしてるとああ……言っちゃった、なんて言って。火照った体をさらに火照らせる。

オレは……

もちろん、ね。

「沢山きもちくしてあげます。覚悟して下さい」

自制心をどっかやってしまった。

盛ったやつ、ナイスとか思っていないんだからっ！(後書き)

完全に趣味全開な展開ww

志摩先生は素敵な大人の魅力のかたまりだと思う。(前書き)

未遂…ではありませんが、まだそこまでやらかしてません(笑)でもやらかす予定です。羽恋ちゃんには申し訳ないけど……

でも羽恋ちゃんともやらかすから大丈夫だよな？

志摩先生は素敵な大人の魅力のかたまりだと思う。

『羽恋ちゃんを尚くんが姫抱きしてどっか行ったよ。』

保健室じゃないかなあぁ（うふっ）

そのメールをG組の眞子からもらって早30分。詳しく聞くと、羽恋ちゃんがぐったりしてたのを真田くんが姫抱きしてたって……事は。

羽恋ちゃんが具合悪いんでしょ。なのに真田くんがまだ帰って来ない。おい。おかしい。

おかしすぎる。
すっごく素敵な予感がするわ！

しかも保健室！そこには志摩先生が……。ベストショットが沢山撮れそうだし。プリントをちゃっちゃと終わらせてにやにやしない様に必死な私。普段清楚ちゃんやってるからきつとみんな想像つかないんでしょね？そう思うとちょっと楽しかったりする。

……ああ、だめだわ。

眞子誘って保健室行ってこよう。

ベッドじゃ思いきりは出来ないからって事で、現在保健室内に備え付けてあるバスルームにいる。

……んだけど。

それでもほら、あんま出来ないでしょ？立てなくなっちゃうと困るし？

でもオレ……

無理かも。我慢、とか我慢とか我慢とかね？

だってさ、志摩先生だよ志摩先生！！

大人の魅力ってやつ？

真っ直ぐに見上げてくる切れ長の瞳にドキドキしっぱなし。

「尚輝」

「……はい？」

「ちゅー、ちようだい」

「しょうがないですね」

「しょうがねえもん……もうじれたくない」

シャワーの音に紛れて聞こえるかすれた声には、確かに余裕が無い。いじらしくていじらしくて。

オレにだって余裕なんて微塵も無いよ。

ふと、物音が聞こえた気がするがこの際無視だ。

顎をくいっと上げて唇を重ねて、何度も何度も軽いキスをしている内に理性が外れそうになる。それでも一度理性を保とうと唇を離すと、嫌だとも言うかの様に綺麗な顔を歪めてた。

少し紅みを帯びた頬とか、乱れに乱れてることとか、全然普段の先生らしくない。

でも一番らしくないのは、余裕が全くと言って良い程無い所。オレがしっかりしないとイケないんだろっけど。

体の芯が痺れるみたいにびりびりなってきた、収集なんてつく訳無いし、当然しつかりなんて無理な話し。

どうしょ……。

なんて思いつつ、ためらい無く続けるオレはいろいろアウトだと思っ。先生とこんな事しちゃってる時点でアウトすら越えちゃってるんだろっけど。

でも。それでも。

「ん、ふ……」

小さく喘ぐ志摩先生は魅力的過ぎるから、そんな事気にしちゃいけない。

薬を盛られているせいなのだろうが、キスだけで半分泣きが入っている。さすが媚薬。さすが性欲をかき立てる薬……！！

首に回される腕に引き寄せられて、さらに距離をつめる。

そのせいで下半身のイケない所が……。お願い先生、動かないで……。やばいから。

出来るだけ自制心を保とうって思ってるのに。

くちゅつと唇を離れた志摩先生は一言でオレのなけなしの自制心をぶっ壊してくださいました。

「……なおきつ」

「……はい」

「我慢出来ないっ……」

小首を傾げながら、涙目で、余裕無しで見上げながら。

はい皆さんお待ちせしたわね。

たのつしいショータイムの始まりよーっ!!

「ちょっとちょっと!!羽恋ちゃんがおねんねしてるじゃないっ」

よだれをだばだば垂らして眞子がカメラを構える。声抑えられるならそのよだれも抑えなさいよ。

「……ほんつと、何でこの子はこんなにも天使なのかしらねー」

「女装させたい」

そうね。

「今年の比等祭でさせましょうかね」

「女装、メイド!無理やりメイド、白衣、ナース、ぶ・る・ま」

……萌えるけど、この子の趣味ってマニアックね。

「まこちゃん?」

「なあに」
「ちよつと黙りなさい」
「さーせん」

ハロウィン企画（前書き）

勢いでやっちまいました、ただの会話（笑）なお、本編とは関係が全く無いため、面識が無いはずのキャラ達が親しげに話しておりますV

ハロウィン企画

侑斗「おっす、今年もハロウィンがやって来たな。オレ的にイベントデーって言ったら何か起こると思うのな」

侑里「ふうん。例えば？（棒読み）」

侑斗「例えば、猫ミミと尻尾が生えてくる飴があって、それを尚輝が食べちゃって、とか」

侑里「ばかばかしいけど、良いかも。尚輝お兄ちゃんの猫さん」

志摩「尚輝の猫ミミか……うお、そそる」

羽恋「んむう……っ！！なななんだよっ、何でみんなで見るとだよお……」

志摩「舞巫も似合うと思う」

侑里「型にはまりすぎる位だと思います」

侑斗「だな。何、心配すんなよ。お兄ちゃんがすぐに快樂の世界へふげっ」

侑里「（華麗に跳び蹴りを決めて）侑斗にいの節操なし。性欲のブラックホール」

志摩「あははははっ、言われた言われた。あ、事は思いつきなんだけどよ、みんなで猫ミミ付けて尚輝来んの待とうぜ」

侑斗「あ、それいい！！んで流れて尚輝にもにゃんにゃん付ける！！」

羽恋「お、面白そうだなっ！！（猫ミミ装着）」

志摩「………すっげえ可愛い……」

侑里「やっぱ先輩似合いますね」

侑斗「羽恋ちゃん、どこから食べて欲しい？」

羽恋「ふええ？！た、たたたべ？！……」

侑里「今回は許すから先輩をいやらしくしてね」

志摩「撮影準備かなりよー！！よっしゃ、侑斗いけーっ」

侑斗「任せろ」

羽恋「ええええー!!!」

尚輝「ちよ、侑斗さん何やってんですか!」

侑斗「お、尚輝。羽恋ちゃんをいじめてんの(振り返り際に猫ミミ装着)」

尚輝「……………っ!!(に、ににに、似合っっ!!羽恋の可愛さに可愛さ倍増で侑斗さんはもう、色気がっ、色気が……………Yシャツのボタン二個外しちゃうとか、首筋のチラリズムがっがああがあ、ななななんて、言えない!!真っ赤な羽恋が可愛いとか羽恋をぎゅむぎゅむしながらさわわしてる侑斗さんの手つきが素敵とか……………だ、だ駄目だ!!オレに幹事なんて出来ないよっ)」

志摩「なーおきっ(猫ミミ装着して抱きつく)」

尚輝「のわぁ?!志摩先生っ……………びっくりするじゃないですか(駄目ええええ、Yシャツと白衣と猫ミミのコラボは駄目ええええええええ、失神する、失神する!!)」

志摩「尚輝……………ほら、こっち向きなさい」

尚輝「な、何ですか……………んむっ、ん、んう……………こくっ」

志摩「さて、今飲ませた錠剤は何でしょうか。正解は

び・や・くVV」

尚輝「はいいいいい?!(駄目だ、駄目だよ……………この方々をまとめるなんてオレには無理だよおお)」

侑斗「まじで?保健室行ってくれば。オレと侑里で羽恋ちゃんをいじめてるから」

羽恋「ふええええ?!」

侑里「だって。行ってきて下さい」

志摩「ほら行くぞ」

尚輝「ええっ……やば、体がっ……T r i c k o r t r e a

t、良いハロウィン……をおお……」

ハロウィン企画（後書き）

と、こんな感じですよ。

毎回私の妄想にお付き合いしていただきありがとうございます^

^*

お気に入り登録してくださった方はさらにありがとうございます!!
お気づきかもしれませんが、志摩Tと侑斗がキャラ被りしてます
汗

私の感性ではこれがギリギリなのか……

という事で、アンケート取りたいと思います!こんな感じのキャラを増やして、このキャラとこのキャラのイチャコラウフフが見たい、など何でもオツケイです!!

どうかどうか、私に感想という名の恵みを下さい……^^;

ご協力お願いいたします

女子組大暴走により！（前書き）

大暴走により、これ以上私が管理しきれません（オイ

という事で、今回はかなり短めです。

その代わりと言ったらアレですが、尚輝の妹の那希が性転換とかしちゃって萌えに困まれて奮闘する『とある隠れ女の奮闘記』みたいな題名の話しを出来れば今日中に上げようと思っていますWW都合良く羽恋の弟なんかも出しちゃおうと思っているので、

宜しければそちらもどうぞVV

以上、宣伝でした（＾ー＾；）

女子組大暴走により！

それにしても。

「志摩先生と真田君がいないわね」

「そりゃ仕方ないよ」

眞子はやにやにやにやといかにもな怪しい笑みを浮かべる。

さて、“今回は”何をやらかしたこの子は。

毎回毎回何かしらやらかす眞子の前科をいろいろ、とにかくいろいろ知っている身としては慎重にならざるをえない。

「……何したの」

「みゆたん目怖い」

「あなたの前科と突拍子の無さの方がよっぽど怖いわ」

「てへっ、ありがとう」

駄目だ、この子に無言の重圧は通じない。

でもみゆたんの猫被りの方がよっぽどよっぽどよっぽどよっぽど怖いよ？

笑顔で何を言うか。

「何を今更、よ」

「まっあね」

で？

「あなた、何したの？まだ吐いてないわよ」

「え？ああ

媚薬、盛ったの。志摩先生に」

.....。

「あ、あああなた」

「まあまあ。あんまり大きい声出したら羽恋ちゃん起きちゃうからね」

本当に突拍子の無い子だわ……。へらへらしながら私を宥める眞子に内心呆れつつ。

「良くやったわ」

どっちかと言うと、こっちの気持ちの方が大きいかしらね。

みゆたんならそう言うってくれると思ってた、とでも言いたそうに本日最高の可愛らしい笑顔を見せてくれた。

「んうっ」

と、突然聞こえるやましい声。

とても小さくて沈黙していたとしてもわからないかもしれない位の音量。

でも確信出来る。何故なら私と眞子の萌え察知レーザーがピンピン反応してるから。

それが聞こえたのは、先程から誰かが使っているシャワールーム。シャワーの音に紛れて

「……うふふ、ターゲットロックオン」

聞こえたその声の正体は。

「志摩先生……ね。お相手は、真田くん」

「小さくて性能の良い録音機ことクワチャンの準備おっけい、心の準備おっけい。」

録音……かいしいい！」

尚輝×志摩 in 保健室のシャワールーム？（前書き）

もつとエロくとのリクエストwwを頂きました。実はだーぶ抑えていたので、もうこれからはがんばらなうと思ひます。抑えらるか知らんがな、という事で^^；

この話は少し（？）そういうシーンが入るので苦手な方は戻るボタンをクリックして下さい！

とかいいつつ、最近あつはんな所はあまり書いていない為、ただでさえ低いクオリティがさらに低くなっております（オイ

そしてそういうシーンもはつきり言つてあまり濃い内容ではありませんww

もつともつと描写の仕方を勉強 して見苦しく無い様に頑張りますので、最初の前書きか後書きに書いた事同様、なまあたたかい目で見守つていて下さい……。

それでは、どうぞ*^^

尚輝×志摩 in 保健室のシャワールーム？

尚輝は確実に気持ちいい所を突いてくる。

理性なんてだいぶ前に吹っ飛んだ。今はきもちくなる為なら、何でも出来そうだ。脚を広げて股関節付近の内股に舌を這わせている尚輝の表情を見ているだけでも心臓が痛い。

「んあ」

ふいに与えられた欲望への愛撫で高い声が出る。なかなかそこへは触ろうとせず内股ばかりを執拗になめられ、じれにじれていたから余計に気持ちいい。

しかももたげたそれを握りこんで先端部分を親指で意地悪にぐりぐりといじられる。かと思っいたらその手をすぐに止めるとか、もうじらさないでくれ……。

「志摩先生……もつと、して欲しいですか？」

耳元に柔らかい唇を押し当てて、かすれた声は甘美な言葉を紡ぎ出す。我慢に我慢を重ねたオレだぞ？当然頷くよな。尚輝は分かりましたとでも言うかのように、指の動きを再開した。先程よりも激しく。

「うああ……っ……！」

あまりの快感に意識が飛びそうになる中、ふっと疑問に思った事がある。

あるんだけど……

今でも気になる。なのに、それが何なのか頭では考えられない。

快感って怖えな。思ったのは今なのに、もう忘れるとか……。身体が言う事を聞かない。立ってるのがめっちゃめっちゃつらい。

脚はがくがくふるえるし、口からは自分のものだとは思いたくないような声が溢れてくる。

自分の容姿を見て近付いてくる男や女は沢山いた。今もそれは変わらない。こういう事もかなりしてきた。まあ女とはしなかったけど。

だから慣れているはずなのに、気持ちくなくて気持ちくって仕方が無い。こんなに気持ちいいなんて、一度も思わなかったのに……。薬のせいってのもあると思うけど、他にも何かある……。と言うかあれだな。

今までまともに誰かを好きになる事なんて無かった。オレは尚輝をマジで好きらしい。

それは綺麗だからとか、そんなんじゃない無くて……。こいつの優しさとか茶目っ気とかそんなんに惹かれてるんだと思う。何よりあの時の出来事がでっかいんだろうけど。

知ったのはこいつが高一の時の入学式。きつれーなやつが入って来るって騒がれてたのが尚輝と現生徒会長の瑞穂。確かに綺麗だけど、そういう奴にろくなのがいないのはよおく知ってるから、オレは結構冷めた気持ちでいた。

んで比等は毎年毎年何故か不審者が入り込んでくるから注意してねなんて理事長の話しを右から左へ流してた矢先、ナイフ持ったあほ野郎が突っ込んできた。オレに向かって。

あほ野郎曰わく、オレに突っ込んできた理由は特に無いらしい。

とにかく、オレは不覚にも全然反応出来なかった。直立不動状態に陥ってもう駄目だなんて思った時。

近くに座っていた尚輝が脚を出してあほ野郎を転ばした。

「あ、すみません。オレ脚癖悪いんです」

しかも笑顔で言うもんだからびっくりだよな。

すつと立ち上がってあほ野郎に近付いていく。馬鹿、あぶねえだろ！！ってそれすらも言えずにいたら、あいつさ。

「志摩先生を傷つけたら……。どうなると思いますか？」

なんてこそつと呟いて、真っ青になったあほ野郎に続けざま手刀。どんだけ肝が座ってんだよ。

そつからだよな。何かと気になりだしたのはさ。

ちなみに何でオレの名前知ってたのか聞いたら隣の先生が志摩先生って呼んでましたからとか言いやがった。何処までもわからん奴だ。

……めっちゃめっちゃ話しそれたけど現実逃避だから。きもちすぎるが故の現実逃避だからな。

でその現実逃避で何が言いたかったっていうとな。マジで好きになっちゃってそれにはちゃんと理由があって、んで。

………今までのセックスの中で一番きもちいって事だ。

それと、やっと人を本気で好きになった事と、相手を好きだからこそ、こんなにもきもちいんだろって事。

もちろんオレが現実逃避してる間も尚輝は意地悪に良い場所を攻めてきた。

「志摩先生……そろそろオレも……良いよね？」

「んっ……良い」

でも本気の本気で好きだった事は内緒にしとく。

さっき告白らしき言葉を吐いちゃったけど、あれは覚えてない事にしよう。

そんな事しても、尚輝が困るだけだ。

尚輝×志摩 in 保健室のシャワールーム？（後書き）

宣言通り、一万文字近くあっはんなシーンを続けようと思ったのですが、一旦区切ります。

志摩Tには申し訳無いけどだらだらと続きそう……。

なので語り部を尚輝にチェンジして、後編をよりいやらしくWWWより濃い……内容にしていこうと思います。

今更人物紹介＼(^w^)
尚輝、志摩(前書き)

各キャラクターイメージボイスとして声優さんの名前が書いてありますが、あくまで私の趣味です。こういうの嫌いという方は戻るボタンをクリック m9) . . .)

人物紹介はこれから気が向いたらあげていきます

今更人物紹介＼（＾w＾）尚輝、志摩

真田さなだ 尚輝なおき（イメボイ：緑 光さん）

身長：178

髪：茶髪

誕生日：1・20

血液型：O型

隠れ変態を極めた変態。ここまでは上手く隠し通してきたはずが、最近ばれまくって焦っている最中。家から学校があまりにも離れているため、知り合いのマンションの一室を借りて、そこから通っている。綺麗な容姿とは裏腹に、肩こり症なオジサン体質。勉強も運動も出来るのに残念要素満載なイケメン。

楠木くすのぎ 志摩しま（イメボイ：子安 人さん）

身長：186

髪：栗毛

誕生日：7・19

血液型：B型

比等学園の保健室の先生。いつも無意識に色気を振りまくお年頃には最も危険な人物。人の話しを聞かない所あり。Sっ気が溢れまくっているわりに、尚輝にはMっばい面を見せたりする。よく媚薬を

盛られる。そしてそれを上手く利用する節が……。

尚輝との絡み

尚輝「絡めって言われても……何を話せば」

志摩「んじゃあ、オレの質問に答えろ」

尚輝「まあ良いですけど（また突拍子のない事を言い出すんじゃあ……）」

志摩「してる時どんな反応したらそそる？」

尚輝「ぶはっ」

志摩「思いつきり感じてますってのと、まだ余裕ありますっての。

あーでも無理か」

尚輝「何がですか」

志摩「お前としてるときもちいんだもん。余裕ありますとかマジ無理。たえらんねえ」

尚輝「………！誘ってるんですか」

志摩「そう聞こえたなら………するか？尚輝ならオレ、ネコでも良いぞ。夕子でも良いけど」

尚輝（ちよっ、今はぎゅうとちゅうは………！！）

志摩「ん………良いにおい………」

尚輝「あっ、首筋はっ………VV 嬉しい」

志摩「真っ赤……尚輝可愛い……」

尚輝「んあっ、……せんせっ……だめ、腰くだけちゃっ」

志摩「くだけろよ。支えてやるから」

今更人物紹介＼(^W^)
尚輝、志摩(後書き)

最終的にエロくなる。

だめだこりゃWW

媚薬怖いです。でもありがとう 尚輝×志摩？（前書き）

今回は今までの中で一番おっかないです。危険です。

媚薬も相まっつて。

暴走いたしました……いやこっ、血が騒いで

性描写、作者が嫌いな方は戻るボタン連打m9（「」）

性描写が好きな方は、拙いですがお進み下さい。

作者が好きな方も大歓迎いねえ……

媚薬怖いです。でもありがとう 尚輝×志摩？

らしくなく乱れている志摩先生のそれにくちゅり、と自分のそれをあてやるとびくつと肩が跳ねる。

「先生……リラックスですよ」

「無理だっ……」

胸元にこてんと頭を預けられ、強く抱きしめられる。その要望に応えようと脚をしっかりと開かせて腰を激しく上下に揺する。するとすぐに真っ赤な唇からいやらしいあえぎ声が漏れた。

「ひうつ……！ああ……」

たまらなくなつたのか、ついに瞳からぼろぼろ涙を零して快樂に必死にたえる。卑猥な水音が耳元まで届いて興奮をあおられている気分だ。

さらに志摩先生の色気大放出上目遣いをプラスされちゃあね？たまんないよね。

少しだけ久しぶりにあっはんしてるからってのもあるだろうけど、なんかあれだ。一回じゃ無理。

……え？侑里くんとしたばっかでしょ？うつん、もう二週間は経ってるよ。

ほらお年頃だから。

にしても。

「先生？何で今更声おさえるんですか」

「だ、だって……聞こえたらヤバいだろ」

ふーん。そんな事言われたら意地悪したくなるじゃないですか……？

「ならしなきゃ良いですよ。動くの止めます」

「っ……それとこれは」

「違いますよ。声出るような事しなきゃ良いんです」

「そ……んな……」

あからさまに入こんで、眉を下げる志摩先生。この人は知らないんだろうな。自分の行動一つ一つでこっちが盛り上がったたり盛り下がったりするの。

それなら今度は先生が動いて下さいよ、と少し意地悪。

「イヂワル」

「何とでも言ってお下さい」

……はいはい、唇突き出さないよ。……分かったから、さらに泣かないよ？

「っ……もうやだ……我慢やだって……言った、のに……」

「ふふ……そうですね。ナニをどうして欲しいって言うてくれたら、してあげますよ」

ぞくぞくと体を震わせて唇を小さく動かす。

「聞こえませんかよ？」

「……おま、後で、覚えてろ」

きつと睨まれても、迫力無い。

覚えるのは色気のみ。

それが逆にきゅんとしちゃって。さっきから我慢ばかりで、媚薬を大量に盛られたのにここまで言えるのって凄い。そして破壊力も凄い。今の志摩先生なら男も女も関係無く一瞬で落とせると思う。

えオレ？

とつくに落ちてるよ。

「楽しみにしときます。ほら、何して欲しいの、センセ？」

「……フェラして」

っっ……!!

どうしよ……可愛いこの人!!めっちゃめっちゃ可愛いっ……!!

「何だよ、何して欲しいってい、いっ……言った、から……して欲しい事、言ったのに」

あまりの可愛いさにだんまり状態のオレを、それはしたくないから

ね嫌だからねと捉えてしまったらしい。

「んな事言つてませんって」

「だって、だつてさ……急に、黙ったから」

「じゃあもう一回言つて下さい。今度はきちんと、ナニをどうして欲しいって」

「……言つたら、してくれる？」

「しますよ、何でも」

させて頂きます、何でも！！ええ。

「……オレのペニスを、尚輝の口でぐちゃぐちゃにして」

お願い……と最後に欲情しきつた顔つきで言つてくれる。そんなあなたが好きです！！！！

見事なM字開脚を少し拝んだ後、先生の硬くなったそれを舌で愛撫し始めた。先端のみを口に含んで、卑猥な水音をたてながら舐めあげていく。びくびくとなる志摩先生の反応を見つつそこばかりを執拗に、段々激しく。

「ああう、んっああ、そこ、ばっかああ……全部、全部がいいいっ……！！」

やっぱり我慢ばっかは良くない。先生、生半可な気持ちよさじゃイケなくなってる。それでいてちよつとした事でも普段以上に感じちやうんだから、その気持ちよさは拷問まがいだと思う。媚薬怖い。

先生に頭を抑えられてそれを全部口に含む。

やっぱ、かなりでかい。

口に全部含んだら、喉が圧迫されちゃってる。

でも気持ちよさそうな顔を見てたら……こっちもムキになっちゃうよね？

口からちゅぱつとそれを出して、左手でやわやわと揉みしだいでいい。いい感じに指が白濁で濡れたのを確認して、後ろの蕾を手探りで見つける。

「な、おき……?!」

オレがしようとしている事が何なのか感じたらしい。さすがにび

つくりしているけれど、そこをほぐし終えた頃には表情がとろとろ。ことうめちやめちや素直な所も、良いよね。

志摩先生の魅力の一つだと思う。

「ふ、あんっ」

ぐぶ、と指先を埋めて、ゆっくりと挿入を繰り返す。一本から二本に指を増やして中を掻き回して。多分だけど、普段の志摩先生ならこれ位じゃこんなに反応しないと思う。

だって、この方今にも意識飛ばしそうだよ?!

「先生大丈夫?」

「な、わけ、無いっ……頼むから、前立腺だけは……さわ、るなっ

……!!」

触って欲しいそうです。

任せて。

後日談だけどこの時のオレはにやっ、とSっ気満載な笑みを浮かべていたらしい。

さらに挿入を繰り返して指が付け根まで埋まった頃……。

「ああああっ　　!」

ここ、かな?

敏感に反応した場所をもう一度。すると先生はいやいやをする用に首を振った。

「……みー、つけた」

「やっ、やらあっ!おかしくなうっ……!」

そんな事良いながら長い脚絡み付けてくるの、誰ですか。

そんな事したら、いけない場所が……。何て素敵な二度目のサブ

ライズ。

「ならおかしくなりましょう？一緒に」

「うああっ……！や、やあああっ」

滑舌が回らなくなつて涙もとまらない。それでもまだ意地悪がしたくなつて。

先ほど先生の口から聞き出した要望をもう一度繰り返した。

何かつて？

フェラだよ。

前立腺をいじりつつ、前のそれを辱められたらいくら何でも耐えられなかつた用で。

「いつ……いつちゃ、うっ……ああう……ああ、あ……尚輝っ、なおきいっ……！」

光栄な事に、オレの名前を呼びながら白濁を口の中へ出した。

それでも驚いた事に先生のそれつてば、まだ元気。

もしかしてもしかしたら。

「先生……絶倫？」

思わず呟いたオレに罪は無いと思う。

そして先生は荒い吐息のまま、少しかすれた美声でこう囁いて下さいました。

「ん……媚薬効果も相まってだろうけど。尚輝、まだ……手伝つてくれるよな？」

にやっとな笑う気力は何処にあるのかこの方は。

お前だつてまだイってないだろなんて言われても。

オレは。

飛びつくまでだよ？

媚薬怖いです。でもありがとう 尚輝×志摩 ? (後書き)

志摩先生が絶倫でした。怖いです。

ありがとうございましたm(´▽´)m

今更人物紹介(^ O ^) / (羽恋) (前書き)

今回は羽恋ちゃんです) (

今更人物紹介（＾Ｏ＾）／（羽恋）

舞亜 羽恋（イメボイ：梶 貴さん）

身長：155

髪：赤髪

誕生日：12・18

血液型：O型

イチゴ色の鮮やかな髪とワンコヘアが特徴。イチゴのジャムパンと尚輝が大好き。ひよんな事から女装が趣味に……。沢山の人が無垢な笑顔に惚れるが、本人は何も知らない罪作り少年。

尚輝との絡み

羽恋「なおきなおきーっ」

尚輝「ん、なあに？ぶっ」

羽恋「見てこれ。袖子にもらった！。に、似合うか？」

尚輝「（メイド服っ！？どうしようスカートきわどい……袖子さん ナイスセレクトー！）ん、似合うよ。ぎゅっ」

羽恋「はあうっ……。はっ？！ダメだ、袖子にメイド服を着たら ごぼっししなさいって言われたんだー！」

尚輝「ふふ、何してくれるの？」

羽恋「袖子が言ってた。……とりあえず“濃厚”なちゅーよって…

…

尚輝「な、何て事を！…！！」

羽恋「しゃがんで」

尚輝「はいはい。どーぞ、メイドさん？」

羽恋「ちゅっ、ちゅっちゅぶ」

尚輝「ん、んっう）可愛い！このつたなさが逆に良いっ」

羽恋「ちゅぱっ。どーだ？？」

尚輝「ごちそうさま」

羽恋「えへへ」

尚輝「メイドさん、抱っこしてあげる」

羽恋「わーい！姫抱きだー」

尚輝「……ん？羽恋もしかして……？スカートの中……」

羽恋「……… 柚子が言ってた。メイドさんは

ひもぱんじゃないとダメって」

尚輝（柚子さあああん！！）

美結「（物陰で）ぐっじょぶ」

和やかな時間って素敵(前書き)

何故に急に和やかになったかって？書きたかったんですWW

ですが前話と差がありすぎるので、いろいろまいた種が残っている
ので、次話で何とかします 適当(・o・;))

和やかな時間って素敵

体が熱い。凄く熱い。

でも頭痛とかは無いから熱いだけ。寝る前は痛かったけど……寝てたからかな？もう平気。

ふわふわして意識あんまりはっきりしないし、まぶた重いし。

……あと少しだけ寝てよつと。

眠気の覚めないままぐるぐると考え、再びまぶたをおろそうとして 尚輝がたまたま視界に入った。

近くに椅子を置いて、ベッドに突っ伏している。

相変わらず綺麗な顔だ。すつと通った鼻筋、血色の良い唇。今は閉じられているけれど、目だって大き過ぎない位の二重で、まつげは長い。

「……………いて、くれたんだな」

それが何とも言えず嬉しくて。気が付いたらぎゅうつとハグをしている始末。

シャンプーの香りがした。甘くは無いけど、爽やかかってわけでも無い、何故か落ち着く香り。

「起きたんだ？」

「ふえっ?!」

何だ何だ、起きてたのか!!ハグとかしちやっつてかなり恥ずかしいぞ?!

「おはよう、羽恋」

耳元でいかにも寝起きなかすれた声が小さく囁く。それだけで体の芯が疼いた。

何とかおはようと返したものの、正直自分に戸惑う。

オレ、尚輝の事好き過ぎだろ。

思わずはぁ……とため息をついて、外の景色に目を奪われた。

真っ赤な真っ赤な夕焼け。こちら側はまだ青空が少し残っていて、見事なグラデーションだ。

「夕焼けって綺麗だけど、何か寂しいよね」

オレの視線に気付いたのか、尚輝も視線を外にやる。

ホント、夕焼けを見るとやけに寂しくなるよな。ああ今日も終わるんだなって。……………オワルンダナッテ？ちよつと

待って、今何時？！

「ろ……6時……6時って」

「え？あはは、羽恋4時間は寝てたからね」

「……なおき……ごめん」

こんな寝てたなんて、思わなかった。これは流石に迷惑かけ過ぎだろ、オレ。なんて内心を知ってか知らずか、くすつと笑みを零して。

「平気だよ。気にする事じゃ無い」

頭を優しく撫でながら安心させてくれる。

「間宮先生にはクラスメートが伝えてくれたみたいだし、親御さんには志摩先生が連絡してくれたから」

「……そうじゃ無くて、いやそれもそうだけど。なおきが」

「だから、平気って言うてるでしょ？羽恋が心配だから側にいたの。なおきはオレを舞い上がらせる方法を知ってるんだな。独り言の様に呟いたつもりが、聞こえていたらしい。」

「そうかな？　でも最近、オレもいるんな人に対してよく思うよ。」

この人は、知ってるって。オレが単純なだけだろうけど」

相変わらず夕焼けを見つめている横顔を盗み見て、それならオレなんて単細胞だと本気で思った。なおきがおはようって言うってくれるだけで嬉しいし、遊ぼうって言うてくれるともっと嬉しい。きゅんきゅんする。

「あ、それと、熱が下がらないと遊んであげません」

「えーっ?!」

「当たり前でしょ。その代わり、お見舞いに行つてあげる」

参った、どっちみち嬉しい。

「だけどね？遊びたいのはオレも一緒。だから」

早く、治しなさい？

意地悪な顔をした、普段は使わない命令口調のなおき。

女の子達がギャップは素敵よ、ときらきらしながら言ったのが
やっと理解出来た気がする。

ファミレスでオアシスに囲まれました(前書き)

長くなりそうなので一区切り。

まいた種は回収出来ませんでした……(泣)

次、次こそは！

ファミレスでオアシスに囲まれました

今日は土曜日。見事に風邪を治した羽恋と、駅内のファミレスでウフウフと仲良く昼食を食べている最中。

グラタンをもきゅもきゅやってる所なんかもー、可愛くって可愛くって。写メりたかったけど我慢した。泣きそうになりながら我慢した。最近オレの中に住むヘムタイっていうケモノに気づかれやすくなってるから……ね？

けど爽やかに見えている予定の笑顔を貼り付けて、懸命に我慢していたオレに、神様はさらなる追い討ちをかけてくれた訳だよ。

「尚輝と羽恋」

よっ、と声をかけて下さった後光がマブシイその方は……

「志摩先生?!」

保健室の白衣の天使こと志摩先生。

「志摩だけ? ひどいなあ……。埋めちゃうよ」

「間宮先生まで??!」

何気に怖い事言い出す笑顔が眩しい担任の間宮先生。

「な、な何で?? 何で先生達がいるんだ??」

羽恋もパニック状態。

なーんでだ? なんて言ってもね? 間宮先生??

……ときめ……。いたりなんかしないんだから。

首を小さく傾げるお茶目なお茶目な先生は素敵……。なんて思ってないよ。

「……あなたに会いに来たんだよ、尚輝くん」

耳元でこそつと呟かれて一瞬にしてチキン肌になった。

心臓がきゅう、となる。

やめてくれるかなあ……。勘弁してよ。

「なんて、ね？ふふつ。あ、店員さん。席、ここでも良いですか？」
間宮先生が指差したのはオレ達のいる4人掛けの席。先生のきらきら爽やかな笑顔に、どこか夢見心地な店員さんに了承を得て
「2人も、大丈夫かな？」
に喜びを必死に押し隠してはい、と頷いた。

「はいあーん」

「あーん」

あぐつ。

「ん〜、ハンバーグも良いね。頼んじゃおうかな」

「ぶはつ、おまつ、相変わらずよく食べるな」

「誉め言葉として受け取っておくね」

間宮先生と志摩先生はもの凄く仲が良いなとは思ってたけど……まさかプライベートでも遊ぶ程だとは、びっくり。

でもね？オレそろそろ参ってるよ。だって仲良いつて、度を越えた仲の良さだから。今のあーんとかあーんとかあーんとか。

後は

「志摩、口にソース付いてるよ。何かダサイ、かな」

「そろそろ黙れよ毒舌魔。笑顔が怖い」

「そんな。おつちよこちよいは本当に変わらないよね？それが可愛いつて意味だよ」

にこつと爽やかさに色気を漂わせて微笑んだかと思つたら、志摩先生の唇に指先を這わせてソースを取り、それを自分の口へと運ぼうとして

間宮先生の指先を、志摩先生がちゅぱつと舐めた。

「っ……………！！」 尚輝

「……………な、なっ……………」 羽恋

動転しているオレ達の横で、愛の劇場は尚続く。

「ん……………ダメだって」

「ダメ？ ああお前、体中性感帯だもんな」

何でそんな事知ってるんですかーっ！！

なんて聞ける訳も無く。

それからしばらくあつはんな会話は続き、にやにや笑っている志摩先生に間宮先生が参った、と言ってようやく一区切りついた。

「全く志摩つてば、場所をわきまえてよ」

「わきまえれば何しても良いのか」

「良いよ。今更だし」

今更っ？！この2人過去に何したんだろう……………。気になる。

向かい合って座っている先生達をちらつとさりげなく見つつ、内心疑問でいっぱい。

本当はね？どんな関係なんですかとかね、聞きたい訳だよ。口がうずうずしちゃったりするんだよね。

それと、さつきから気になってるのは…………視線。周りの女性客は先生達に釘付け。

和風ハンバーグとナポリタンを食べ合いつこなんてしちゃってるから、余計に、ね。

「な、何か見られてないか？」

それにはちよつと鈍感な所がある羽恋も気付いたみたい。

小声で、首を傾げまゆをひそめて聞いてくる。食後のチョコシヤーベツトに差し掛かっている所で、スプーンを加えてる様子なんかやっぱり可愛い。羽恋はオレのオアシスだと思うよ。

「うんそうだね。お二方、すこーし自重をして下さい」

「…何を？」

……。
「……………もういいです」

うん、オレが悪かった。

「そんな、尚輝……………オレ達を見捨てるの？」
はい？」

「そうか……………見捨てるのか。オレは尚輝の事好きなのに」
うぐっ……………！！変な意味は無い所か、おふざけなのに何だかドキドキする自分がある。

「オレなんか、愛しちゃってるんだよ」

横に座っている間宮先生はあろうことがぎゅっと抱きついてきた。
周りにいる女性客数人が倒れていくのが視界の隅で見える。

ど、どうしよう？オレ“確信犯2人”をどうにか出来る話術なんて持っていないよ？！

「わわわわかりましたからっ……………！！間宮先生、離れて下さい」

「……………やだ」
やだて……………やだって言ったよこの方！！かつ可愛いとか、思っ
てないし。

「だって、志摩の事は名前で呼ぶんだからオレだって名前が良いよ」

「ごめんなさい可愛いとか思っ
てないしとか思っ
てごめんなさい可愛
い
です。めっちゃめ
っちゃ可愛い
です！」

「遊乃先生、場所をわきまえて下さい？」

話術の無いオレは先程のセリフをパクる事で危機脱出をはかった。
「オレだってあなたの事が好きです」

これでどうだ！！

なんて思っ
てません。遊乃先生の温もりにやられてる最中です。

余裕？

無い無い。そんなもの微塵も有りやしない。

それ所かきゆんきゆん祭り。隣で遊乃先生に抱きつかれてるし斜め前では志摩先生が上目遣いしてくるし前では羽恋が……何故かむくれています。

羽恋の表情を見た感じ

『何でオレは構ってくれないんだよ……』

だと思っただよ。流石我がオアシス！！

「ねえ尚輝、それ、無自覚？」

「それって何ですか？」

それ？

「無自覚です」

オレが首を傾げてる横で羽恋が返答。

ちよ、だからそれって何？！

「あのなあ、普通オレだって好きですなんて言うか？」

「……だって、事実です」

なんかちよつと告白めいちゃったけど、嘘はつけない。確かに危機脱出の為に言っただってのもあるけど、好きなのは事実だから。

「分かった、尚輝は天然タラシなんだな」

「何でそうなるんですか！！」

タラシ……タラシって言われた。

地味にシヨック。

「せんせー……タラシって言われました」

むすつとして遊乃先生の腕に絡みつく。いいもん、慰めてもらっもん。

「よしよし。あんまり落ち込まないよ？志摩の事なんか無視して良からね。……尚輝に好きって言ってもらえて、オレ嬉しかったから」

髪の毛をふわふわと撫でながらあやすように囁く。そしてそのまま頭にちゅ、とキスを降らせてくれた。

ああああ……どうしよう……なんかすっごく嬉しい。

「だからきつと、志摩は嫉妬してるんだよ、オレに」

「あほっ、勝手な事言うなって。第一最初に無自覚かって言い出したのは遊乃だろうが」

「あ痛っ、デコピンは酷くない？」

2人が来てから一気に明るくなつた。会話を聞いていると面白くって面白くって、羽恋もパフェを食べながらくすくす笑ってる。

「やべっ、遊乃、時間！！」

「え……？あホントだ。行かないと」

どうやらこの後急ぎの用事があるらしく、食後のデザートをぱぱっと片付ける。

「用事って？」

「モデル」

へえ、お二方ならありえ……

「モデル?!」

内緒にしようと。ゆくゆくはバレるだろうけど。

遊乃先生の言葉にこくこくと首を動かすオレと羽恋。

「よろしい。んじゃ、一万円置いてくから余ったら持っつけ」

「ばいばい、また学校でね」

女性客の残念そうな視線を浴びながら颯爽と立ち去る先生方。

最後まで格好良かったな、と呟く羽恋に小さくうん、と頷いた。

我慢はよくないから。(前書き)

うひゃあ、予定が大幅にずれました。

何か気分が盛り上がり、最高潮が何故か日曜の夜……

ないわー、；

何はともあれ、クオリティの低さには突っ込まないであげて下さい；

我慢はよくないから。

「お……おじゃましましゅ……あ」

「くすっ、どうぞ」

頭を抱えて噛んだ……噛んだ……！！と悶絶している羽恋に密かに和み、中へと迎え入れる。

ドアを閉めて横顔を見ると、もう何度も来ているのにどこか緊張気味な表情。唇をきゅっとしめて、頬を少し赤く染めて……

サソツテイルノカイ？

「何をそんなに緊張しているのかな？」

「……ち、違うもん」

もんだってもん！！

か わ い い……………。

「じゃあ、何？」

わざと窮地に追いやるオレって、意地悪かな？でも、追いやりたくなっちゃうんだよね。それが性だよね？

「ん？」

「う……だつて」

「だつて？」

ぷいっとそらされた視線を、頬を包んで戻させる。直視状態になつてりんご状態な羽恋。

瞳を潤ませて上目遣いの羽恋。

眉をひそめて困る羽恋。

全部全部、愛しく思った。

……あれ？志摩先生に対してもときめいてたよね、オレ。
これって、いけないんじゃないの、ねえ？
そう思うと、何だかやるせない。それでもときめいたもんは仕方が
無い。仕方が無いっただけ無い。

こうなったらとことんやりたい様にやっちゃおう！

「なんて、ね」

「ふえ？」

「羽恋を困らせるつもりは無いよ。ごめんね。言いたくなったら、
言って」

ごめんと言いつつ困らせる。ある意味これって最終奥義だと思う。
決まった、なんていつの世代のヒーローだよと突っ込まれそんな事
を考えながらリビングへ。

どうぞ、と冷蔵庫に作ってあったアップルティを机に置く。ありが
と……と赤くなったまま呟いて口をつける。

それからしばらくの沈黙。それが耐えられなかったのか

「なあ……、何で一人暮らしなんだ？」

と切り出してきた。

「ん？ああ、家から学校って凄く遠くて。実は県外なんだよね」

「うおお、そうなのか？！」

「うん。だからこうなったら一人暮らししなきゃいなさいよって両親
に言われてさ」

「な、何だか話の早い両親だな……」

「でしょ？まあ、自由にやれるから良いんだけど」

そうか。自由って良いななんてしみじみ言う様子がおかしくってついつい吹き出した。

確かに自由で良いなって気持ちは分からないでもない。でもね？

「案外、寂しいものだよ一人暮らして」

「寂しい……のか」

「うん。時たまにもの凄い孤独だなんて思ったりもする」

ガラス作りの透き通ったティーカップを音を立てぬよう置く。羽恋もそれに習ってゆっくりと机に置いて、寂しくなったら、オレが……尚輝を癒やすから……いつでも電話して、と小さな小さな、それでいてどこか落ち着く声音で欲しい言葉をくれた。

「うん。……ありがとう、羽恋」

アップルティを堪能して、羽恋から嬉しい言葉をもらって。幸せいっぱい状態のまま、オレがいつも使っている部屋 寝室へ大量のお菓子と共に招き入れた。

あ、別にやましい意味じゃ無いよ決して。

お菓子片手にトーキングタイム。

リビングでも良かったんじゃないかって？鋭い突っ込みだね。鋭すぎてぱっくり切れちゃいそう。

深い意味は無いです。

ぼふつとごく自然にベッドへ腰掛ける羽恋の様子に、少しやましい想像をしちゃうのはお年頃だから仕方がない。

やましい意味は無くてもやましい想像はしちゃうもんだよ。

「にしても、志摩先生と遊乃先生モデルやってるんだね」
「んあ……………びっくりした」

あの2人の美貌とスタイルならありえるけど、にしたってぶっ飛んでる。

さすがというか、なんて言うか。

ここまで来ると、感服だ。

「ファミレスに来たのもびっくりしたけど」

「……………そ、うだな。仲良さそうだった」

「うんうん。プライベートでもかなり遊んでそう」

「あ、私服も…………おしゃれだった」

「そうだね。あのまま撮影出来ちゃいそう。すっごくきまってるし、
憧れる　っ?!」

よね、と言おうとして体が傾いた。急な事に頭が付いていかない。

んん?どうなってるの?!

よし、とりあえず状況判断だ。

まず羽恋の相変わらずキュートなお顔が目の前にある。

それから、ちよっとナキソウ。

……………目の前?泣きそう?!

とそこまで来て理解した。

……………オレ、羽恋に押し倒されてるっ!!

「ばかつ、尚輝のばかあつ……………」

「え、ちよちよ、羽恋?!」

「何で相手にしてくれなかったんだ!!」

「へ?」

急な問いかけに思わず変な声が出る。

「うう……だって、だってファミレスにいる時……せんせ、達ばっかあ」

な、なるほど。

「オレ……生意気でワガママ言ってるのっ、分かってる。でも、でも尚輝と……オレだって、ひっ、ううっお話したかったもんっ」

羽恋っ……

羽恋……やばいよやばいよ！！理性どこですかっ、尚輝君の理性どこですかっ?!間に合わないよ、良いの良いね、おっけ!!

「なおきいっ……好き……大好き」

「羽恋……」

「約束っ」

「……や、やく、そく?」

「ちゅーいっぱいしてくるって言ったっ!いっぱい、いっぱい、尚輝としたい。もう我慢したくないんだっ……せんせ達に嫉妬なんて……くだらない、し馬鹿みたい……けどっ　んっ」

もう嫌だ。我慢出来ないのはオレだよ。

あんまり可愛い事言う羽恋がいけないんだからね?

唇だけじゃ嫌だ。もっと、もっと中まで……。

我慢はよくないから。(後書き)

とつても中途半端ですみません……。

次はあつふあつふさせる予定です ^ *

「あああつ、なおきい」

「羽恋、いっぱいいじめてあげるから」

「らめえ、そんなしちゃあああつ!」

位はしちやうよて)ry

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2781v/>

とある隠れ変態の物語

2011年12月11日23時54分発行